16　院内各部署の業務実績

院内各所属一覧（掲載ページ）

	ページ	所　属
診療部	50	内科統括
	52	糖尿病・内分泌・血液内科
	54	呼吸器内科
	55	消化器内科
	57	腎臓内科
	59	神経内科
	61	精神神経科
	62	循環器内科
	64	心臓血管外科
	66	小児科
	68	外科
	70	整形外科
	71	形成外科
	72	脳神経外科
	74	皮膚科
	75	泌尿器科
	76	産婦人科
	78	眼科
	80	耳鼻咽喉科
	81	放射線画像診断科
	83	放射線治療科
	84	麻酔科
	85	病理診断科
	86	歯科口腔外科
	87	手術管理科
	88	非常勤医師
	90	臨床研修医
診療技術部	91	臨床検査科
	93	中央放射線科
	95	臨床工学科
	97	リハビリテーション科
	99	栄養科
	101	医療技術科
	104	薬剤科

	ページ	所　属
看護部	106	看護部長室
	110	外来
	112	手術室
	113	中央材料室
	114	ＩＣＵ（集中治療室）
	115	３Ｂ病棟
	116	４Ａ病棟
	117	４Ｂ病棟
	118	５Ａ病棟
	119	５Ｂ病棟
	120	６Ａ病棟
	122	６Ｂ病棟
	123	７Ａ病棟
	124	７Ｂ病棟
	125	３Ｃ病棟
事務部	126	病院経営課
	127	病院総務課
	128	医事課
	130	地域医療連携センター
	133	医療安全対策室
	135	感染対策室

■内科統括

1　診療の概要

消化器内科、呼吸器内科、腎臓内科、糖尿病・内分泌内科、血液内科、神経内科などの内科系診療科がそれぞれ専門性の高い診療を行うと同時に、相互に協力しながら内科全般の多様な疾患を網羅する診療を行った。

2　令和２年度の診療

（１） 診療体制

・新型コロナウイルス感染症に対しては外科系診療を含む全診療科で診療にあたった。内科は主に中等症、重症症例の診療、メディカルチェックを分担した。

・新型コロナウイルス感染症重点医療機関として専用病床を確保したため、内科病床は令和２年度４月の 182 床から８月には 171 床、12 月には 160 床に調整した。

・外来ブースが造設され、10 診療室での診療が可能となった。

・リウマチ・膠原病内科非常勤医師による診療を継続した（毎週金曜日）。

（２）内科の医局会とカンファレンス

・内科医局会を定期開催した。診療部長・病棟長会議は随時開催した。

・早朝カンファレンスは９月２日から 12 月９日は毎週水曜朝に開催したが、それ以外の期間は新型コロナウイルス感染症蔓延のため休止した。

3　研修・教育

（１） 診療参加型臨床実習（クリニカルクラークシップ）

・消化器内科に東京慈恵会医科大学より９名

・腎臓内科に川崎医科大学より１名（新型コロナ感染蔓延により大学指示で休止）

（２） 初期臨床研修

・管理型：12 名

・協力型：腎臓内科に沼津市立病院より１名

（３） 後期臨床研修

・基幹施設として専門研修プログラム「富士市立中央病院内科専門研修プログラム」を登録

・連携施設として「東京慈恵会医科大学附属病院内科専攻医研修プログラム」、「静岡県立総合病院内科専門研修プログラム」、「国際医療福祉大学熱海病院内科専門研修プログラム」を登録

４　令和３年度の目標

（１）　診療体制

・通常診療と新型コロナウイルス感染症診療を並行して行う。

（２）　研修・教育体制

・令和３年度から基幹施設として後期研修専攻医教育を開始する。

（文責　笠井　健司）

■糖尿病・内分泌・血液内科

1　スタッフ

役　職	氏　　名	役　職	氏　　名
診療参事兼部長	藤井　常宏	部長	安藤　精貴
医長	赤嶺友代	医員	榮本昭仁
医員	山崎永幹	医員	神谷育

2　令和２年度の診療実績

（１）外来診察（専門）

藤井医師（悪性リンパ腫、骨髄異形成症候群、自己免疫性血小板減少性紫斑病、多発性骨髄腫、急性、慢性白血病等）、安藤医師（糖尿病、内分泌疾患、妊娠糖尿病等）、山城医師（糖尿病、一般疾患）、辻本医師（糖尿病、内分泌疾患）、末吉医師（糖尿病、内分泌疾患）←昨年度情報

（２）紹介外来患者数

藤井医師 121 名、安藤医師 189 名、山崎医師 156 名、榮本医師 159 名、神谷医師 147 名

（３）主な患者統計（新規患者数）

	平成 29 年	平成 30 年	令和元年度	令和２年度
糖尿病	784	651	730	656
悪性リンパ腫	48	36	39	45
特発性血小板減少性紫斑病	47	51	42	44
骨髄異形成症候群	22	20	27	26
多発性骨髄腫	22	19	18	15

3　令和３年度の目標

1）糖尿病内分泌内科：外来患者が多く、開業医からの紹介患者が増加している。富士市在住の患者が中央病院に集中している現状を踏まえ、市役所職員、富士市医師会と協力して、糖尿病病診連携ネットワークを構築している。今後とも、病診連携を行っていく上で問題点を抽出し改善していく。入院患者への対応としては、令和２年度に新たな病棟医を３名迎え、新しい体制で診療を開始した。当院への糖尿病の紹介患者は、健康診断や症状自覚を契機として近隣の診療所を受診し重度の糖尿病を指摘されるケースが特に多く、初めて糖尿病の診療を開始することがある。初期の段階で診断すること、合併症が進行することの重大性、患者自身の病気の理解が重要であり、チーム医療を充実させるとともに富士市全体の糖尿病への関心を高める工夫が必要である。

2）血液内科：当院は日本血液学会の専門研修教育施設に認定されている。

血液内科外来は、月曜日と木曜日に行っている。血液内科専門医のもと、悪性血液疾患（急性白血病、悪性リンパ腫、慢性骨髄性白血病、慢性リンパ性白血病　骨髄異形成症候群骨髄線維症等）や良性血液疾患（特発性血小板減少

性紫斑病、多血症、血小板減少性紫斑病、血友病、原発性免疫不全症等）の診断、治療を行っている。また骨髄バンクの調整医師活動も行い、骨髄移植の橋渡しのコーディネートを行っている。静岡県東部で無菌室を有している施設は少なく、当院では無菌室を現在３床有しており、急性白血病の寛解導入療法に使用している。

（文責　藤井　常宏）

■呼吸器内科

1　スタッフ

役　職	氏　　名	役　職	氏　　名
部長	木村　哲夫	医員	平野　悠太
医員	新井　宏和		

2　令和２年度の診療実績

呼吸器内科は、一般的な肺炎から当地域に多い気管支喘息、慢性気管支炎、肺気腫といった慢性呼吸器疾患や、肺結核、肺非結核性抗酸菌症、気管支拡張症、肺がん等の診断及び治療を行っている。

気管支拡張症等による喀血に対しては、放射線科に依頼して気管支動脈塞栓術で止血処置を行っている。

また、慢性気管支炎・肺気腫・間質性肺炎等で、慢性呼吸不全状態にある患者に対しては、在宅酸素療法（HOT：Home Oxygen Therapy）を導入し、家庭での酸素投与を可能とし、生活の質の向上を図っている。

肺がんに関しては、気管支内視鏡で診断し、治療は主に静岡県立静岡がんセンター（駿東郡長泉町）と連携し、総合的な治療を目指している。

当院は静岡県東部地区で唯一結核病棟（10 床）を有しており、近年再び増加しつつある結核に対しても治療を行っている。

	平成 30 年度	令和元年度	令和２年度
気管支内視鏡検査	67	75	56

3　令和３年度の課題

令和３年度は常勤医師４名による診療体制が可能となるため、引き続き安定した診療を行うことによって、地域医療に貢献する所存である。

（文責　木村　哲夫）

■消化器内科

1　スタッフ

役　職	氏　　名	役　職	氏　　名
副部長	金井　友哉	医長	土屋　学
医員	渡邊　俊宗	医員	田中　孝幸
医員	橋本　泰輔	専任医師	古守　知太郎
専任医師	松本　尚樹		

2　令和２年度の診療実績

東京慈恵会医科大学消化器・肝臓内科および内視鏡科から派遣された７人の常勤医師および５人の非常勤医師で診療にあたった。

入院診療に関しては、主に７Ｂ病棟で診療にあたった。

消化器内科専門外来は月から金曜日の全ての外来診察日で行った。

令和２年年度の内視鏡検査・治療件数は以下の表に示す。

EUS、ERCP といった胆膵内視鏡の検査・処置は豊富な症例数を維持している。

内視鏡治療

	平成 30 年度	令和元年度	令和２年度
内視鏡的止血術	119	110	92
大腸ポリペクトミー/EMR	365	291	212
内視鏡的粘膜下層剥離術	47	46	23

胆膵検査・治療

	平成 30 年度	令和元年度	令和２年度
ERCP	464	438	443
EUS	190	202	208

経皮的ドレナージ

	平成 30 年度	令和元年度	令和２年度
PTCD	17	7	10
PTGBD	107	137	122

肝癌治療

	平成 30 年度	令和元年度	令和２年度
RFA or PEIT	27	23	25
TACE or TAI	43	45	39

３　令和３年度の目標

EUS、ERCP といった胆膵内視鏡の検査・処置が前年同様に豊富な症例数であり、静岡県でも上位となる件数であった。来年度も実績を維持できるよう取り組んでいきたい。

昨今の消化器診療において、幅広い消化器分野の全ての領域で高水準を維持することは容易なことではないが、慈恵医大から派遣される非常勤医師の先生方の力も借りて、富士市医療圏の消化器診療は当院で完結できるよう精進していきたい。

（文責　金井　友哉）

■腎臓内科

1　スタッフ

役　職	氏　　名	役　職	氏　　名
部長	笠井　健司	副部長	高橋　康人
医員	加藤　一彦	医員	寺嶋　理沙
専任医師	戸崎　武		

2　令和２年度の診療実績

新型コロナウイルス感染蔓延により腎臓病診療は制限せざるを得ず、CKD ネットワークによる紹介患者数は減少した。一方、慢性透析導入患者数は 61 人と減少したが、腎生検件数 43 件とは増加傾向が鮮明となった。コロナ禍にあっても早期からの腎臓病への治療介入が進み、透析導入件数の減少のトレンドが明瞭になっている。当院のクラスター終息後に受診する腎臓病患者の増加が顕著であり、診療水準の向上を以って対応してゆく必要を痛感している。

	平成 30 年度	令和元年度	令和２年度
血液透析施行患者数	263	288	312
血液透析施行回数	2,799	2,647	2,589
腹膜透析患者数（年度末）	12	11	9
慢性透析導入患者数	100	67	61
血液透析／腹膜透析	98/2	66/1	60/1
急性血液浄化施行患者数*	72	65	65
持続血液濾過透析	49	47	47
エンドトキシン吸着	7	6	4
単純血漿交換	2	4	9
二重濾過血漿交換	6	5	3
血漿吸着療法	0	0	1
白血球除去療法	8	3	1

*急性血液浄化療法施行件数に関しては各科管理の症例を含む

手術件数	102	80	80
血液透析アクセス	97	76	78
腹膜透析アクセス	5	4	2
腎生検	35	35	43
ＣＫＤ紹介（透析を除く）	242	275	201

３　令和３年度の課題

（１）　富士市 CKD ネットワークの活動を中心に腎臓病の早期診断・早期治療介入を継続する。

（２）　腎病理診断を中心に診療水準の向上を図り、増加する腎臓病患者への対応能力を向上させる。

（３）　富士市 CKD ネットワークへの薬剤師会参画により医薬連携を進める。

（４）　富士市透析（防災）ネットワークの施設数増加（８施設）に対応すると同時に、市外の医療機関との連携の強化を図る。

（５）　腎臓病療養指導士の育成を推進し、腎臓病診療に精通した医療者を増やす。

（６）　腎臓病診療と新型コロナウイルス感染症診療とを並行して行う体制を維持する。

（文責　笠井　健司）

■神経内科

１　スタッフ

役　職	氏　　名	役　職	氏　　名
部長	河野　優	医員	高橋　麻葵

２　令和２年度の診療実績

令和２年度は部長と非常勤医師とで外来診療を行った。

外来は、火曜日を除く月から金曜日の週４回、主に紹介制を取り、物忘れ、しびれ、歩行障害など様々な神経症状を主訴とする患者の診断、治療および経過観察を行った。

入院に関しては、部長と神経内科医員・当院研修医が主治医となり治療を担当した。下記に記載したとおり、多種多様な疾患が見受けられた。

また平成 28 年度から日本神経学会・准教育施設の認定を受け、専門医教育施設として活動しており、当院での研修が専門医習得につながることが確保された。

（１） 疾患別入院患者数

		平成 30 年度	令和元年度	令和２年度
血管障害	脳梗塞/脊髄梗塞	111	107	100
	脳出血	1	2	1
	一過性脳虚血発作	7	3	1
感染・炎症性疾患	脳炎/脳症	14	14	7
	プリオン病	4	2	3
	髄膜炎	6	9	5
変性疾患	認知症	3	8	2
	パーキンソン病関連疾患	36	29	19
	脊髄小脳変性症	0	0	1
	運動ニューロン病	1	8	11
脱髄性疾患	多発性硬化症/視神経脊髄炎	13	23	11
末梢神経障害	ギランバレー症候群	4	8	0
	慢性炎症性脱髄性多発神経炎	4	1	3
筋疾患	筋炎	4	6	1
	重症筋無力症	2	1	2
発作性疾患	てんかん/痙攣発作	34	22	29
その他		12	22	13
計		256	265	209

（２） 特殊種検査実績

	脳波	針筋電図	神経伝導速度
外来	69	8	65
入院	79	7	20

（３） 臨床調査個人票作成

神経疾患の多くは難病として特定疾患治療研究事業の対象となっている。令和２年度はコロナの影響もあり、申請書類提出が延期された影響もあり、臨床調査個人票の作成総数は新規・更新を併せて 37 件と少なめであった。

３　令和３年度の課題

① 常勤医師の増員
② 内科入院主治医との連携徹底
③ 神経診療の啓発、教育
④ 富士市難病連との交流

（文責　河野　優）

■精神神経科

1　スタッフ

役　職	氏　　名	役　職	氏　　名
部長	外岡　雄二		

2　令和２年度の診療実績

平成 27 年４月より、外来診療を再開。

(1) 外来診療：週３日　　※月・水・木

対象疾患：統合失調症、気分障害、神経症、認知症、精神遅滞、てんかん、アルコール依存症、症状精神病など。

(2) 入院患者診察：毎日。

対象疾患：当院で入院治療中の患者様の精神症状の病状管理…不眠・不穏・不安・抑うつなど。

(3) 臨床心理士による心理カウンセリング・心理検査

※月・木　週２日予定　（本格受け入れ時期　未定）

3　令和３年度の目標

非常勤の臨床心理士が浜松医大から派遣され、心理カウンセリングを実施しているが、需要が急激に増えている。それに対応するため、派遣される心理士を今年度から２名として患者に対し心理カウンセリングを実施していく方向だったが、コスト算定の問題が発生し、現在新たな心理カウンセリングの依頼および心理検査の実施が困難な状況になっている。

当科では関係部署と協議しこの問題の早期の解決をはかり、今後も精神医療および臨床心理士による心理カウンセリングの充実を図っていく方向である。

（文責　外岡　雄二）

■循環器内科

1　スタッフ

役　職	氏　　名	役　職	氏　　名
診療参事部長	阪本　宏志	副部長	富永　光敏
医長	木下　浩司	医長	蒔田　憲太朗
医長	増谷　祐人	医員	河津　圭佑

2　令和２年度の診療実績

富士地区の循環器疾患の救急医療を、心臓血管外科と協力し24時間365日体制で、看護師、放射線技師、臨床工学技士、臨床検査技師と伴にチーム医療で取り組んでいる。今年度はコロナ禍の影響で入院制限が必要な時期もあったが、急性冠症候群に対し緊急冠動脈造影検査を163例に施行し、内121例に対して経皮的冠動脈インターベンションを施行している。また、心肺停止や心原性ショック例に対しても経皮的心肺補助法（PCPS）や大動脈バルーンパンピング法（IABP）などの機械的補助装置を用いて積極的に救命に努力している。

検査では心臓超音波検査にて非侵襲的に弁膜症や心機能の評価ができ、多列型Ｘ線CT装置(MDCT：256スライス）および核医学検査などで冠動脈疾患を診断することが可能である。冠動脈疾患には多枝病変を有する症例も多く、血管内超音波法（IVUS)、光干渉断層法（OCT)、冠血流予備量比（FFR）等の画像診断を併用し、病変の形態や組織性状の把握、虚血の有無等を評価し治療に取り組んでいる。

下肢動脈疾患の治療も積極的に行い、総腸骨動脈、大腿動脈、膝窩動脈以下の病変に対し計44例にバルーン拡張やステントを用いた血行再建術を施行し、救肢率は93.2%であった。

また、今年度は不整脈に対してアブレーション治療を58症例に対し施行し、致死性不整脈に対する植込み型徐細動器（ICD）と伴に難治性心不全治療の心臓再同期療法（CRT）の施設認定を取得した。

当科は日本循環器学会認定循環器専門医研修施設、日本心血管インターベンション治療学会研修施設に認定されており、循環器専門医３名、日本心血管インターベンション治療学会認定医１名、専門医３名、指導医１名を有し、学会発表も積極的に行っている。教育面では他施設から医師を招き、知識および技術の向上に勤めている。

	平成30年度	令和元年度	令和２年度

冠動脈造影	1,003	1,111	946
冠動脈インターベンション	364	414	326
緊急症例（治療）	168（136）	168（136）	163（121）
末梢動脈疾患	34	38	44
アブレーション	18	49	58
ペースメーカー植え込み術（リードレス）	58	48	65(8)

３　令和３年度の目標

不整脈に対してのアブレーション治療医は週 1 回の派遣医師のため治療症例数に制限がある。当院でのアブレーション治療は、病診連携により周辺の先生方にも周知され、症例数が増えているが、治療開始までの待機期間が長いのが現状である。そのため、医師の増員、特に不整脈医師の常勤を働きかけていきたいと思っている。

（文責　阪本　宏志）

■心臓血管外科

1　スタッフ

役職	氏　名	役職	氏　名
部長	田口　真吾	医長	成瀬　瞳

2　令和２年度の診療実績

令和元年４月の成瀬医師赴任以降、富士市在住の当科常勤医師が約 15 年ぶりに２名体制となり、医局関連他施設では当たり前に行っている 24 時間・365 日の緊急手術対応が最低限ではあるが可能となった（実際は成瀬医師が第一助手として未だ一人立ちが困難なため、当科 OB の田中圭先生の御助力が未だに必須ではあるが）。それまでは、ほぼ無条件で他院搬送が第一選択であった急性Ａ型解離等の救急搬送症例に対して、窓口となる循環器内科医師がまず緊急手術を前提に対応する雰囲気が確立された事はこの１年での大きな収穫であった。一方、当院は年間手術総数が 3,000 件以上あるにも関わらず麻酔科の常勤医師数が２名であるために、夜間・休日の緊急手術は並列が不可で原則１件しか受け入れられず、また開心術に就ける手術室看護師も限られている上に公務員であるが故に突然の勤務変更が困難な事もあり、手術室の受け入れ不可が理由で他院搬送もしくは搬送準備中に急変となった症例が、院内発症例を含めて今年度は 10 例近くあった。新年度年頭に行う各診療科部長による個別の院長面談で、当院全体の問題として麻酔科常勤医の増員等は要望したが、他科・他業種に関わる内容であり早期の改善は困難と思われるため、当分は現状維持を前提に可能な範囲で対応するつもりである。

更に令和２年は、全国的な COVID-19 感染の影響により多くの大学関連病院で手術のみならず入院自体を制限する事となり、当院では疑似症病棟や ICU 内の重症個室の開設、それに合わせた看護師の配置転換等に伴い、第２波・第３波の流行に合わせて入院病床数が減少となった。その影響で全科で一定期間定時手術を制限もしくは中止する方針となり、当科での令和２年の手術件数は 46 例（開心術 34 例・末梢領域等 15 例）と前年の 64 例（開心術 46 例・末梢領域等 18 例）から約３割減となった。ただし前述の緊急手術受け入れ制限下でも、10 年ぶり以上となる急性心筋梗塞による心室中隔穿孔例を含めて緊急・準緊急手術を８例（開心術５例・末梢領域等３例）と少数であるが行う事ができた。令和２年度の疾患別（重複含む）手術件数は、下記のとおりである。

	平成 30 年	令和元年	令和２年
虚血性心疾患	8	16	11
弁膜症	18	34	21
不整脈	1	10	3
胸部大動脈	6	10	7
先天性心疾患	1	0	0

腹部大動脈	11	8	6
末梢血管	12	9	9
心臓腫瘍、外傷等	3	2	4
計（重複症例あり）	60	89	61

平成 30 年以降、胸腹部大動脈瘤の全例およびステントグラフト治療の適応である腹部大動脈瘤症例、膝窩動脈以下の病変を合併する閉塞性動脈硬化症については集約施設に紹介する方針としており、令和２年も約 20 例を他施設に紹介した。当院の体制や過去の成績等からこの方針は今後も継続するが、緊急症例も含めて当科で対応可能な症例については極力当科で手術を行う事を原則とし、最低限の手術件数は維持していきたい。

３　令和３年度の目標

令和３年の年明け早々、全国的なニュースとなった院内クラスターが発生し、令和２年末から再開した定時手術が再び全科で中止となり、３月のクラスター収束宣言を経て再々開となった。しかし、４月以降全国的な第４波の流行が始まっており、令和２年度同様、COVID-19 対応のために入院・手術数をともに制限する事が既に議論されているため、令和３年度の手術件数は昨年と同程度かそれ以下になる事が予想される。その少ない症例の手術成績を上げる事が最重要であるが、昨年は術前・術後カンファレンスでの注意事項が徹底できずに、手術自体は問題なく終了したと思えるものの結果的に５例を失う事となった（内３例は一般病棟での食事・離床開始後の急変）。手術とは術中手技のみではなく退院までの経過をも意味するため全ての責任は術者にあるが、カンファレンスの内容が臨床に反映されず手術成績に直結した事例が１年で複数あった事は許容されないので、基礎的かつ根本的なところから見直す必要性を痛感した。本年度は、基本に立ち返って当たり前の事を当たり前に行う習慣を徹底していきたい。

（文責　田口　真吾）

■小児科

1　スタッフ

役　職	氏　　名	役　職	氏　　名
部長	秋山　直枝	医員	上野　健太郎
副部長	海野　浩寿	専任医師	持田　純
医長	本木　隆規（10 月～）	専任医師	渡辺　健太（～９月）
医長	井上　隆志	医員	藤多　慧

2　令和２年度の診療実績

基幹病院の小児科として、一般小児科診療、小児救急、新生児医療を地域で開業されている先生方、富士市救急医療センターと連携し、24 時間 365 日体制で、小児患者の受け入れを行っている。また、静岡県立こども病院とも連携している。

令和２年度の入退院数の減少は激しく、全体で 446 件、特に呼吸器系感染症の減少を認めた。内訳として平成 26 年７月から認可されている NICU（新生児特定集中治療室）136 件、呼吸器系 41 件、感染症 20 件、その他であった。

専門的医療として、小児消化器内視鏡検査は上部消化器内視鏡、大腸内視鏡、小腸カプセル内視鏡を行っている。食物アレルギーに対しての食物経口負荷試験は総数 36 件、内訳は　鶏卵 22 件、牛乳４件、小麦２件、その他（そば、カニ、ピーナッツ、くるみ、アーモンド、とうもろこし、豆腐、桃）８件であった。平成 30 年６月からはスギ・ダニの舌下免疫療法を行っている。

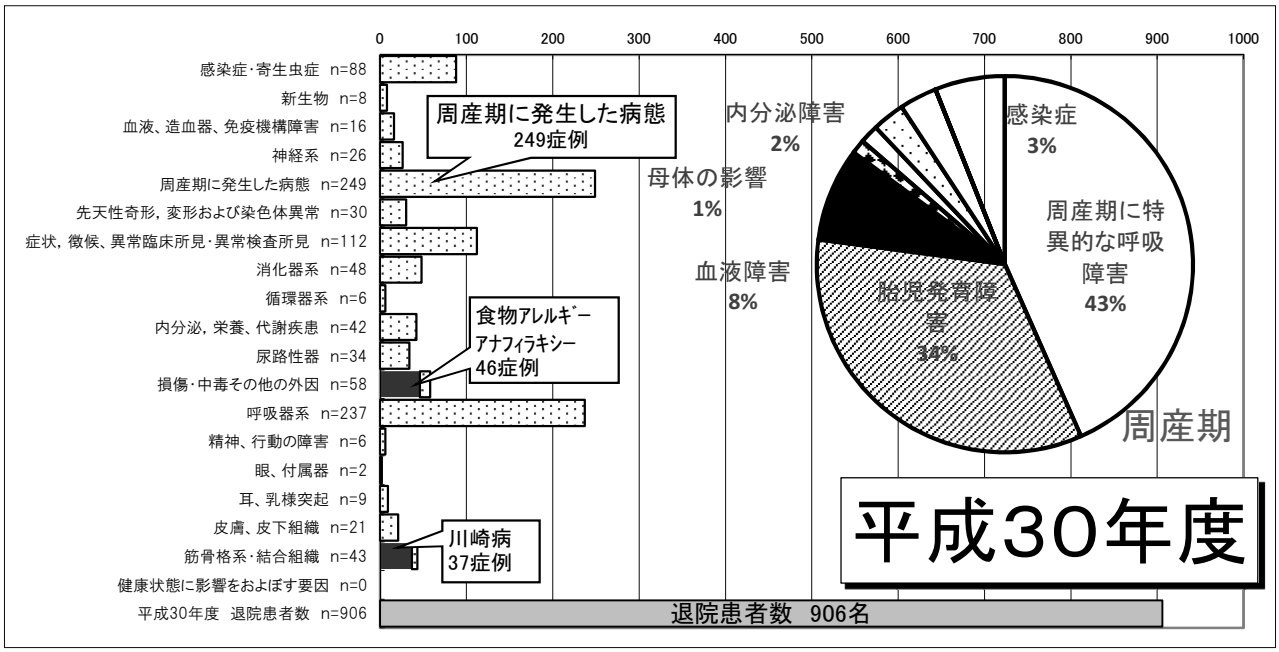
平成 28 年９月より始まった診療参加型臨床実習として東京慈恵会医科大学５～６年生の受け入れを行っており、４週間毎１名ずつ配属されている。

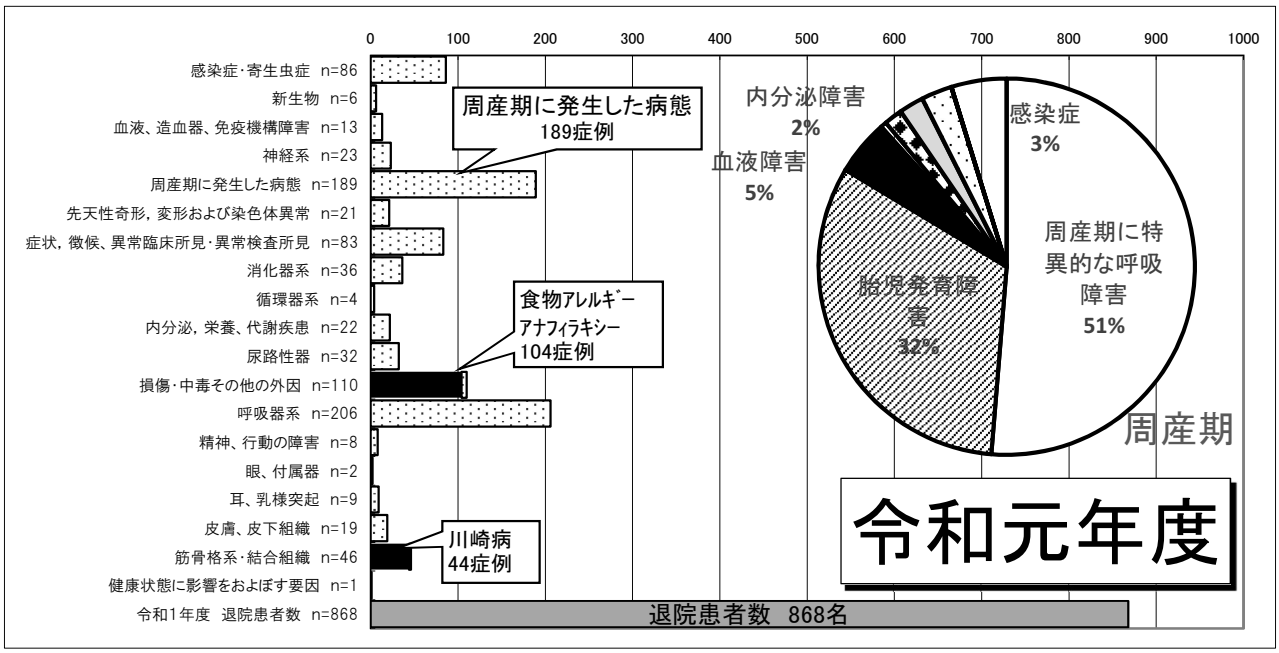
週１回の重症患者への対応シミュレーション、病棟での勉強会を頻回に行うとともに、学会発表や論文投稿など、医療全体への貢献も積極的に行っている。

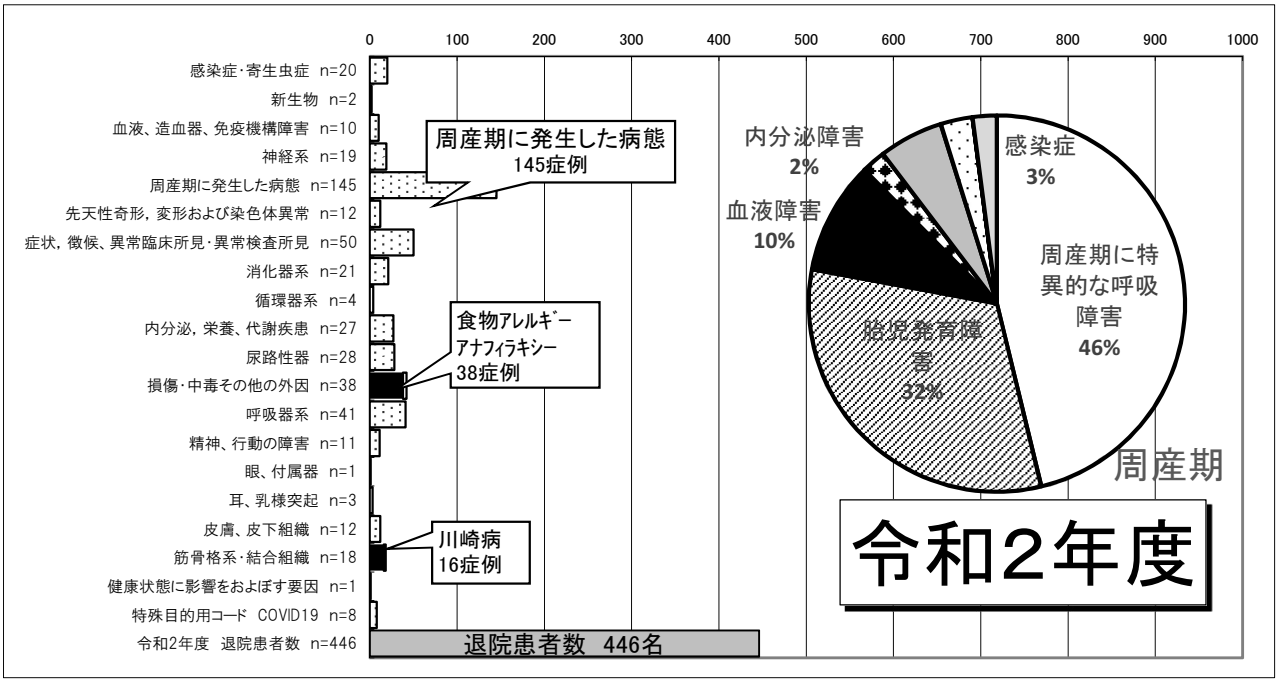
3　令和３年度の目標

地域医療機関、静岡県立こども病院と密に連絡をとり、プライマリ・ケアから専門的医療まで包括的で質の高い小児医療を提供することを引き続き目指していきたい。

（文責　秋山　直枝）


0 100 200 300 400 500 600 700 800 900 1000
感染症・寄生虫症 n=88
新生物 n=8
血液、造血器、免疫機構障害 n=16
神経系 n=26
周産期に発生した病態 n=249
先天性奇形，変形および染色体異常 n=30
症状，徴候、異常臨床所見・異常検査所見 n=112
消化器系 n=48
循環器系 n=6
内分泌，栄養、代謝疾患 n=42
尿路性器 n=34
損傷・中毒その他の外因 n=58
呼吸器系 n=237
精神、行動の障害 n=6
眼、付属器 n=2
耳、乳様突起 n=9
皮膚、皮下組織 n=21
筋骨格系・結合組織 n=43
健康状態に影響をおよぼす要因 n=0
平成30年度 退院患者数 n=906
周産期に発生した病態
249症例
食物アレルギー
アナフィラキシー
46症例
川崎病
37症例
内分泌障害
2%
母体の影響
1%
血液障害
8%
感染症
3%
周産期に特
異的な呼吸
障害
43%
胎児発育障
害
34%
周産期
平成30年度
退院患者数 906名


0 100 200 300 400 500 600 700 800 900 1000
感染症・寄生虫症 n=86
新生物 n=6
血液、造血器、免疫機構障害 n=13
神経系 n=23
周産期に発生した病態 n=189
先天性奇形，変形および染色体異常 n=21
症状，徴候、異常臨床所見・異常検査所見 n=83
消化器系 n=36
循環器系 n=4
内分泌，栄養、代謝疾患 n=22
尿路性器 n=32
損傷・中毒その他の外因 n=110
呼吸器系 n=206
精神、行動の障害 n=8
眼、付属器 n=2
耳、乳様突起 n=9
皮膚、皮下組織 n=19
筋骨格系・結合組織 n=46
健康状態に影響をおよぼす要因 n=1
令和1年度 退院患者数 n=868
周産期に発生した病態
189症例
食物アレルギー
アナフィラキシー
104症例
川崎病
44症例
内分泌障害
2%
血液障害
5%
感染症
3%
周産期に特
異的な呼吸
障害
51%
胎児発育障
害
32%
周産期
令和元年度
退院患者数 868名


0 100 200 300 400 500 600 700 800 900 1000
感染症・寄生虫症 n=20
新生物 n=2
血液、造血器、免疫機構障害 n=10
神経系 n=19
周産期に発生した病態 n=145
先天性奇形，変形および染色体異常 n=12
症状，徴候、異常臨床所見・異常検査所見 n=50
消化器系 n=21
循環器系 n=4
内分泌，栄養、代謝疾患 n=27
尿路性器 n=28
損傷・中毒その他の外因 n=38
呼吸器系 n=41
精神、行動の障害 n=11
眼、付属器 n=1
耳、乳様突起 n=3
皮膚、皮下組織 n=12
筋骨格系・結合組織 n=18
健康状態に影響をおよぼす要因 n=1
特殊目的用コード COVID19 n=8
令和2年度 退院患者数 n=446
周産期に発生した病態
145症例
食物アレルギー
アナフィラキシー
38症例
川崎病
16症例
内分泌障害
2%
血液障害
10%
感染症
3%
周産期に特
異的な呼吸
障害
46%
胎児発育障
害
37%
周産期
令和2年度
退院患者数 446名

■外科

1　スタッフ

役　職	氏　　名	役　職	氏　　名
院長	柏木　秀幸	部長	梶本　徹也
副部長	鈴木　俊雅	副部長	吉田　清哉
副部長	良元　和久	副部長	坪井　一人（７月～）
副部長	道躰　隆行（～６月）	副部長	北村　博顕
医長	入村　雄也	専任医師	吉岡　聡（～12 月）
医長	武田　光正（１月～）	専任医師	佐藤　和秀
専任医師	赤岡　宗紀		

2019 年 12 月撮影

2020 年 12 月撮影

2　令和２年度の診療実績

食道良性手術（アカラシアや逆流性食道炎など）７件、食道がん手術　０件、スリーブ状胃切除術（減量手術）２件、胃・十二指腸良性手術８件、胃がん手術37件、小腸手術（腸閉塞や悪性疾患など）34件、虫垂切除術76件、大腸手術106件、肛門手術（痔疾患など）12件 、そけい・腹壁ヘルニア手術100件、胆嚢・胆管結石手術84件、肝臓・胆道がん手術52件、膵がん手術13件、乳がん手術48件、呼吸器手術23件、小児外科手術43件

	平成 30 年度	令和元年度	令和２年度
上部消化管	106	92	54
下部消化管	265	221	247
肝胆膵	157	139	149
ヘルニア	112	140	110
呼吸器	26	42	23
乳腺	51	57	53

小児外科	28	31	43
手術総数(鏡視下手術)	914(342)	887(312)	785 (261)

３　令和３年度の目標

令和２年度は年末のCovid-19ウィルス感染による院内クラスター発生により手術制限がかかり、悪性腫瘍及び緊急手術以外の良性疾患（胆石、ヘルニア、痔核など）は軒並み延期せざるを得ず、近隣の病院へ紹介した症例も少なくなかった。そのため手術件数は昨年度比で大幅に減少した。現在は制限なく手術ができているが、今後も制限がかけられる事態は想定され、外科としてこれまで以上に感染対策に留意したい。また経営コンサルトによるアドバイスについても、ベネフィットに見合う改善点を洗い出し、できることから取り組んで収益アップを目指したい。

また外科の診療領域は、手術だけではなく化学療法や放射線治療（radiation therapy & IVR）、緩和医療にも深く関与している。そのため外科だけで完結できる領域はなく、これまで以上に内科、小児科、麻酔科、放射線科、薬剤師、認定看護師（がん化学療法、皮膚排泄ケア、緩和ケア、感染管理、クリティカルケア、手術、各領域の認定看護師が当院在籍）との一層の緊密な連携を築いてゆきたいと考えている。加えて富士市の中核病院として、今後は地域がん診療連携拠点病院の取得を目指して、キャンサーボードの設置・開催や周囲のがん診療病院との連携の充実を図っていきたい。

（文責　鈴木　俊雅）

■整形外科

1　スタッフ

役　職	氏　　名	役　職	氏　　名
部長	加藤　努	副部長	三橋　真
医長	原田　直毅（～6 月）	医長	船井　充　（～6 月）
医員	山下　紀　（～12 月）	医員	笹本　翔平（7 月～）
医員	塩飽　克庸（7 月～）	医員	閏谷　大希（1 月～）
専任医師	生田　匠　（～6 月）	専任医師	羽尾　元史（7 月～12 月）
専任医師	小武海 信之（１月～６月）		

2　令和２年度の診療実績

静岡県東部地域の二次救急病院として、多くの外傷患者の診療・治療を行っている。近年の、高エネルギー外傷は減少傾向にあるが、高齢者の転倒による骨折が多かった。年間手術件数は約 500 件であり、その内、変形性関節症に対する人工関節手術は年間約 60 件占めている。骨切手術や骨バンクを用いた高難度の再置換手術も多く行われていた。高齢者の大腿骨転子部骨折においては、48 時間以内の手術を目指し、治療を行った。

乳児股関節検診については、世の中で股関節脱臼の見逃しが報告されており、令和元年度からは当院で出生した乳児に対し、エコーを用いた検診が行えるよう体制を整えた。

	平成 30 年度	令和元年度	令和２年度
人工関節置換術	44 件	39 件	42 件
大腿骨近位部骨折(骨接合術・人工骨頭置換術)	213 件	209 件	127 件
その他	331 件	236 件	319 件
合計手術件数	588 件	484 件	488 件

3　令和３年度の課題

富士市の健康寿命を向上させるためには、高齢者の骨折・寝たきりを予防することが重要である。当院での大腿骨頸部骨折治療患者は 200 件を超え、そのほとんどが合併症を併せ持っている。高齢者の手術をいかに早期に行えるかが課題であり、他科との連携をとり、早期に手術ができるような体制を整えていきたい。また、骨粗鬆症リエゾンチームを立ち上げ、近隣病院と連携を取りながら骨粗鬆症への介入を行っていきたい。

（文責　加藤　努）

■形成外科

1　スタッフ

役　職	氏　　名	役　職	氏　　名
医長	赤石　渉	専任医師	鴨﨑　貴大

2　令和２年度の診察実績

着任に際して、救急要請に可能な限り応需し、形成外科的治療を要する緊急性の高い外傷を当院で完結させることを目標に、診療に当たった。

COVID-19 クラスター発生による診療体制の縮小・待期手術の延期といった事態も生じたが、手術症例数は例年並みとなった。

手外科症例は単純な腫瘍切除を除いて外傷を中心に250例以上、顔面骨骨折は鼻骨骨折を除き、多発骨折を中心に12例であった。マイクロサージャリーは神経縫合術が14例、切断指再接着が６例、遊離皮弁・遊離複合組織移植が９例であった。

令和２年度の診療実績は下記のとおりである。（参考：平成30・令和元・２年度併記）

疾患分類別手術件数(年度別)

	平成30年度		令和元年度		令和２年度	
	入院	外来	入院	外来	入院	外来
外傷	219	239	115	127	221	115
先天異常	10	3	12	4	14	4
腫瘍	69	170	90	210	56	198
瘢痕･瘢痕拘縮･ケロイド	15	11	11	12	11	12
難治性潰瘍	4	3	25	8	25	5
炎症･変性疾患	36	105	41	73	26	71
美容(手術)	0	0	0	0	0	4
その他	1	1	17	0	5	3
計	354	532	311	434	358	412

3　令和３年度の課題

引き続き、当医療圏の地域住民が安心して生活を送れるよう、外傷症例へ注力していく。マイクロサージャリーの技術研鑽に努め、遊離皮弁・遊離複合組織移植は 10 例を目標とする。

（文責　赤石　渉）

■脳神経外科

1　スタッフ

役　職	氏　　名	役　職	氏　　名
部長	諸岡　暁	副部長	野田　靖人
医員	堀内　一史	医員	縄手　祥平

2　令和２年度の診療実績

入院疾患の割合および手術数は表のとおり。

（１）入院疾患別割合(%)

	平成 30 年度	令和元年度	令和２年度
くも膜下出血	7	6	7
脳出血	13	16	19
脳梗塞	9	9	15
頭部外傷	38	40	34
腫瘍	6	6	2
脊椎	2	1	1
血管内治療関連	12	9	10
その他	14	13	12

（２）手術件数

	平成 30 年度	令和元年度	令和２年度
頭部手術	183	178	143
①開頭手術	61	38	22
②神経内視鏡手術	4	4	3
③脳血管内手術	25	32	35
脊椎手術	3	2	1

・疾患別入院数割合はほぼ前年度同様。

・脳血管内治療は増加し、血管内治療専門医は非常勤であるが 24 時間以内の対応はできている。脳梗塞の血栓溶解治療を引き継ぐ血栓回収治療も行なっている。

・脳腫瘍は減少して、開頭手術が減少した。

・入院期間はＤＰＣⅡ期を意識し、脳卒中地域連携パスによるリハビリテーション転院が順調である。

３　令和３年度の課題

・手術数は引き続き 200 件超を目標とする。

・脳梗塞の機能回復のため脳血栓回収を増やす。

・血管内治療専門医および脊椎手術専門医の常勤派遣を大学教室へ要請していく。

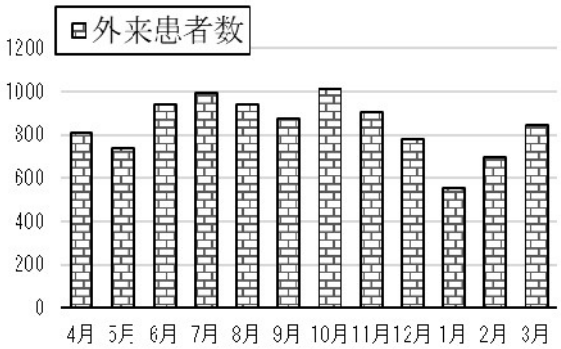
（文責　野田　靖人）

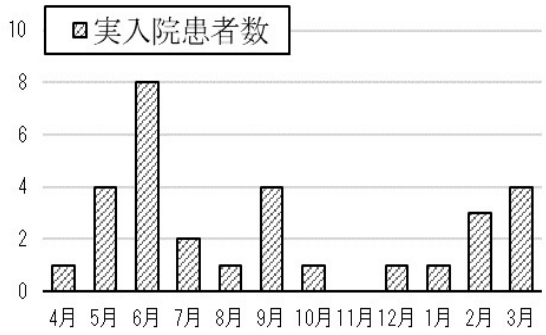
■皮膚科

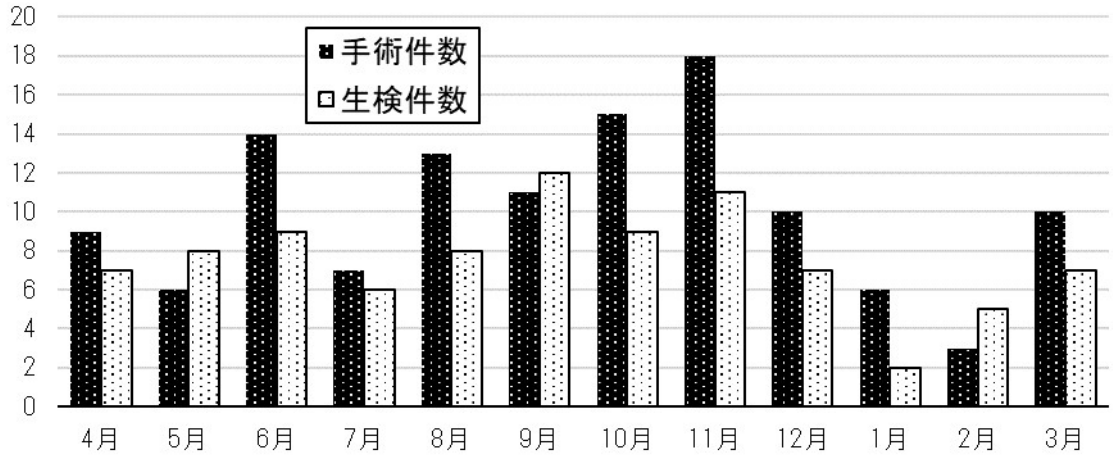
1　スタッフ

役　職	氏　名	役　職	氏　名
部　長	津嶋　友央	医　員	田嶋　瑞帆

2　令和２年度の診療（業務）実績







	平成 30 年度	令和元年度	令和２年度
外来患者数	11, 462	12, 268	10, 098
実入院患者数	62	54	30
手術件数	176	224	122
皮膚生検件数	115	125	91

3　令和３年度の課題

入院適応のある症例は、患者の症状にあわせて入院治療をすすめ、より質の高い医療を提供する。

（文責　津嶋　友央）

■泌尿器科

1　スタッフ

役　職	氏　　名	役　職	氏　　名
部長	後藤　博一	副部長	鈴木　英訓
副部長	村上　雅哉		
医員	石川　美夢（～６月）	医員	倉脇　史郎（７月～）
医員	高見澤　重彰（～９月）	医員	岩本　侑也（10 月～）

2　令和２年度の診療実績

令和２年度は常勤医５名と非常勤３名で診療を行った。悪性疾患、尿路結石、尿路感染症など泌尿器科領域全般の疾患に対し、初期治療から緩和医療、終末期治療まで一貫した診療を行い、富士宮地区を含む富士医療圏で入院診療・手術が可能な泌尿器科として、中心的存在として診療を行っている。診療は　１次、２次だけでなく、場合によって３次診療まで行っている。平成 28 年度から開始した腹腔鏡手術は今まで開腹手術で行っていた前立腺癌、膀胱癌まで適応を拡大し、令和元年 11 月からは腹腔鏡下前立腺全摘術、腹腔鏡下膀胱全摘術も導入した。平成 30 年度に新機種に更新された ESWL に加え、令和２年３月から経尿道的結石破砕術に必要なレーザー破砕装置も導入し、結石の部位、大きさに関係なく患者さんに適した結石治療を行えるようになった。転移性腎癌、尿路上皮癌や去勢抵抗性前立腺癌に対しては、通院化学療法や新規治療薬を積極的に導入し治療を行っている。泌尿器科女性専門外来も、非常勤の女性医師が引き続き担当し、順調に診療が行われた。

主な手術の年次推移　　＊（）内は腹腔鏡下手術の件数

	平成 30 年度	令和元年度	令和２年度
経尿道的前立腺切除術	45	45	25
経尿道的膀胱腫瘍切除術	241	204	192
腎・尿管悪性腫瘍手術	36（36）	41（37）	27（24）
膀胱全摘術	10（0）	9（3）	9（9）
前立腺全摘術	15（0）	13（8）	20（20）
経尿道的結石破砕術	4	15	98
体外衝撃波結石破砕術	527	528	519
年間手術件数 （ESWL 除く）	489	460	472

3　令和３年度の目標

昨年度導入した前立腺癌、膀胱癌に対する腹腔鏡手術、レーザー破砕装置による結石治療を平素より紹介いただいている近隣のクリニックにも周知いただき、紹介患者、症例数を増やしていきたい。また、既に保険診療における拡大適応も行われている手術支援ロボットの導入の礎としたい。

（文責　村上　雅哉）

■産婦人科

1　スタッフ

役　職	氏　　名	役　職	氏　　名
部長	矢田　大輔	副部長	小田　彩子
医長	佐藤　あずさ	医員	中野　史織
医員	飯田　瀬里香	医員	飯田　瀬里香
医員	竹内　文子		

2　令和２年度の診療実績

当科は地域周産期母子センターとして、ハイリスク分娩や地域からの母体搬送の受け入れを行っている。分娩件数は横ばいであるが、ハイリスク症例や母体搬送に関しては増加傾向にある。

婦人科疾患では、骨盤臓器脱に対する腹腔鏡下仙骨腟固定術の認定施設となり、現在までに 14 件手術を施行した。周術期合併症は認めなかった。

悪性腫瘍手術は、近隣に静岡県立がんセンターがあるが、患者さんの希望があれば当院で手術を施行している。それに応えるべく、病気だけでなく、患者の背景や社会環境を鑑みた医療を提供できるよう努力している。

主な診療実績

	平成 30 年度	令和元年度	令和２年度
分娩件数	589	578	583
母体搬送受入数	86	77	91
帝王切開件数	135	107	128
内視鏡下（腹腔鏡下および子宮鏡下）手術数	184	239	209
良性疾患（開腹及び膣式）手術数	230	126	107
悪性腫瘍手術数	23	25	17
総手術数	535	497	461

生殖補助医療

	平成 30 年度	令和元年度	令和２年度
人工授精件数	98	41	5
体外受精件数	98	19	10
融解胚移植件数	143	54	32

３　令和３年度の課題

令和３年４月で常勤医が８名、うち産婦人科専門医が５名で診療にあたる。令和３年度も引き続き地域周産期母子センターとして、ハイリスク症例や母体搬送もしくは急変した妊婦が、安心してお産ができるように周産期チームとして、小児科医師、看護師、その他のスタッフとの連携を今後も大事にしていく。

婦人科手術は内視鏡手術の適応が拡大している。今までは開腹手術を選択していた大きな子宮筋腫に対しても内視鏡手術を行うようになっている。また、令和２年度から骨盤臓器脱に対する腹腔鏡下仙骨腟固定術を開始した。今後も合併症のない安全な医療を提供できるように研鑽を積む。また学会活動に積極的に参加して最新の知見を吸収し、実臨床に還元できるよう邁進する。

（文責　矢田　大輔）

■眼科

1　スタッフ

役　職	氏　　名	役　職	氏　　名
部長	藤谷　暢子	副部長	渡辺　勝

2　令和２年度の診療実績

外来診療は、眼科医２名、視能訓練士３名、看護師２名、医療補助１名、受付１名で行った。

基本的に、月・火・水・金曜日は２診、木曜日は１診（第４木曜日のみ２診）であった。

午前中は、紹介予約枠を使った紹介初診を最優先とし、９時から予約診察を行っている。予約外や初診も 11 時までの受付で診察可能である。午後は完全予約検査であり、視野検査、眼位検査、レーザー、蛍光眼底撮影、抗 VEGF 薬硝子体注射、ボツリヌス毒素製剤注射、涙点プラグ・鼻涙管シリコンチューブ挿入・霰粒腫・治療的表層角膜切除等の外来小手術、小児の弱視・斜視外来を行っている。また、ブドウ膜炎に対する自己注射の指導や、点眼が不得意な患者に対する看護師の点眼指導等、きめ細かい対応も行っている。

平成 24 年から開始したロービジョン外来も継続している。月１回予約制で、補助具を合わせ、日常生活のアドバイスを行っている。iPad によるロービジョンケアも取り入れており、他院からのロービジョン外来のご紹介にも対応している。

また、平成 26 年から始めたオルソケラトロジーは、現在機器の問題で、新規受け入れを休止している。

山梨大学眼科から飯島裕幸名誉教授にお越し頂く教授外来は継続している。今後も２ヶ月に１回程度難症例を診ていただくことで、患者さんのためだけでなく我々の診療技術の向上にもなると考えている。

中央手術室での手術は、月曜午後と火曜午後に行っている。白内障を中心に、緑内障、網膜剥離、翼状片、斜視、眼瞼内反症など行っている。

白内障手術は、片眼２泊３日入院と日帰り手術を選択して頂き、行っている。様々な理由で入院することが難しい患者さんのニーズを受け、徐々に日帰り手術件数が増えている。認知症や精神発達遅滞等のために全身麻酔で行う症例も受け入れており、その場合、入院は４日となる。

月１回山梨大学から専門医を招き特殊な硝子体手術も行い、万全の体制で行っている。

中央手術室での眼科手術

	平成 30 年度	令和元年度	令和２年度
白内障手術	239	241	174
緑内障手術	25	44	29
硝子体手術	20	16	13
網膜剥離手術	0	1	0
強角膜縫合術	2	2	1
翼状片手術	2	3	3
斜視手術	0	2	2
眼瞼内反症手術	10	5	5
その他	1	6	2
計	299	298*	229

（＊同時手術の為、重複あり）

	平成 30 年度	令和元年度	令和２年度
抗ＶＥＧＦ硝子体注射	215	228	88

３　令和３年度の課題

当科の位置付けとしては、他院・他科との連携である。令和元年度は、近隣の開業医の先生を個別訪問し、更なる連携を図った。当科の取り組みをお知らせすることで、御紹介頂くことが増え、良い機会となった。今後も連携強化に努める。

選定療養となった多焦点眼内レンズの取り扱いも、令和 3 年度から始まる。まだどのくらいのニーズがあるか不明であるが、治療の選択肢を提供したいと考えている。

令和元年度末から流行している新型コロナウイルス感染症がまだ消退しない。そのため、令和２年度は眼科診療の縮小をやむなくされた。感染予防に努めながら、診療体制を維持する事が最も優先される課題と認識している。感染拡大の際にも、眼科疾患の患者さんが困らないように、入院病床を使わない診療方法も柔軟に取り入れたいと考えている。

（文責　藤谷　暢子）

■耳鼻咽喉科

1　スタッフ

役　職	氏　　名	役　職	氏　　名
部長	重田　泰史	医員	児玉　浩希
医員	森下　幸太郎		

2　令和２年度の診療実績

耳鼻咽喉科は３人体制で診療をし、耳、鼻、咽喉頭、頸部の診断・治療を幅広く行っている。午前中は一般外来を行い、特別な治療や処置が必要となる患者さんは午後に来ていただき治療、処置を行っている。手術日は火・金の週２日間で、高度な技術を必要とする手術は東京慈恵会医科大学の医師を招聘し行っている。進行癌症例は静岡県立静岡がんセンターと連携している。また、当科の特色として嚥下障害患者に対する診断・治療を積極的に行い、院内の絶食患者のより安全な経口摂取の再開を目指している。

	平成 30 年度	令和元年度	令和２年度
嚥下機能評価患者	39	34	10
内視鏡下鼻内副鼻腔手術	105	85	76
鼻中隔矯正術	47	35	30
口蓋扁桃摘出術	66	65	37

3　令和３年度の目標

令和２年度は新型コロナウイルス感染症流行の影響で手術件数が減少してしまったが、得意分野である内視鏡下鼻内副鼻腔手術を柱として、手術症例数を増やすことができるよう努力したいと考えている。

耳鼻咽喉科での嚥下機能評価患者は減少しているが、ST も含めた嚥下機能評価患者は増加しており、院内全体としての嚥下機能評価患者数は増加している。引き続き ST と連携して嚥下機能評価を行っていきたい。

（文責　重田　泰史）

■放射線画像診断科

１　スタッフ

役職	氏名
医　長	榎　啓太朗

２　令和２年度の診療実績

引き続き、CT、MRI、RI、超音波に関して可及的迅速に全件読影を行っており、画像診断管理加算２（CT/MR/RI の８割以上の読影結果が、常勤専門医により撮影日の翌診療日までに主治医に報告される事を条件に、１件ごとに 180 点算定される）の算定施設基準を維持することができた。IVR に関しても幅広い処置を施行している。

新型コロナウイルス感染症蔓延のため、画像診断・IVR とも実施件数は前年より減少した。

IVR 部門

	平成 30 年度	令和元年度	令和2年度
合計	190	273	225
Vascular IVR	122	149	126
肝癌の化学塞栓･動注療法（TACE / TAI）	31	26	29
胃静脈瘤の塞栓（BRTO / PTO）	3	7	9
喀血に対する気管支動脈塞栓（BAE）	6	17	8
透析シャントの血管形成術（PTA）	15	10	6
静脈サンプリング（副腎、膵臓、下垂体など）	1	5	4
PICC Line 挿入	22	19	26
子宮筋腫の塞栓術	－	4	5
緊急止血術	20	31	24
動脈瘤、血管奇形、その他	20	30	15
Non-vascular IVR	68	124	99
経皮的生検	22	35	41
膿瘍に対する経皮的ドレナージ	25	53	45
胆道系	8	3	2
血管腫に対する硬化療法	9	3	8
その他	4	30	3

読影部門

	平成 30 年度	令和元年度	令和２年度
総読影件数	35,496	37,437	35,554
CT	21,924	23,176	21,865
MRI	5,683	5,972	5,585
US	7,019	7,347	7,200
アイソトープ	870	942	904

３　令和３年度の課題

・他科との連携をさらに密にしていく。

・IVR 業務の拡充

・読影管理加算２の算定施設基準を維持する。

・病診連携（高度医療機器利用依頼）にさらに力を入れ、逆紹介率向上に貢献する。

（文責　榎　啓太朗）

■放射線治療科

１　スタッフ

役職	氏名
医　長	野中　穂高

２　令和２年度の診療実績

放射線治療科では放射線を用いて様々ながんの治療を行っている。放射線治療は手術、薬物療法と並ぶがんの3大療法のうちの一つで、根治をめざす治療から症状を和らげる緩和治療まで幅広く行っている。放射線治療は全身的な副作用が軽く、機能や形態の温存が可能であることが特徴で、当院の放射線治療の特徴として、画像誘導放射線治療、呼吸性移動対策、定位放射線治療などの高精度放射線治療があげられる。

	平成30年度	令和元年度	令和２年度
総治療人数	144人	133人	196人
肺癌	2	2	2
緩和	4	4	3

３　令和３年度の課題

・以下の高精度放射線治療の普及を目指す。

Intensity modulatd radiation therapy

定位放射線治療

Image-guided radiation therapy

呼吸性移動対策

（文責　野中　穂高）

■麻酔科

1　スタッフ

役職	氏名	役職	氏名
部長	井上　恒佳	副部長	大谷　法理
医長	影山　佳世		

2　令和２年度の診療実績

過去３年間の麻酔科管理手術症例の推移は下表のとおりである。

令和２年度は新型コロナウイルス感染患者、院内クラスター発生などがあり、少なくない期間において手術制限を行わざるを得なかった。年度末ごろにはいくらか回復傾向がみられてきたものの、最終的に麻酔科管理症例数、全身麻酔件数ともに令和元年度に比べて大幅な減少となってしまった。

	平成 30 年度	令和元年度	令和２年度
麻酔科管理症例数	1,733	1,556	1,343
全身麻酔 (他の麻酔方法の併用を含む)	1,701	1,520	1,315
硬膜外麻酔・脊椎くも膜下麻酔 (どちらか一方・両者併用を含む)	26	30	24
その他	6	6	4

3．令和３年度の目標

いまだに新型コロナウイルス感染症は落ち着く気配を見せていないが、可能な限り手術制限は行わず、手術件数を以前と同水準にまで回復させていくことが今後の課題となる。

幸いにして、令和２年度は新型コロナウイルス陽性患者の麻酔管理を行うことはなかったが、今後緊急手術等で陽性患者の麻酔管理を行わなければならなくなる可能性は十分にある。その際の手術時対応について、シミュレーション等をこまめに行い、スムーズな管理が行えるようにしていく必要がある。

また、以前からの課題でもあった麻酔の質の向上については現在改善中である。こちらも改良できる点がまだあるはずであり、各科との協議のうえでさらなる改善をめざしていく。

（文責　井上　恒佳）

■病理診断科

１　スタッフ

役　職	氏　　名	役　職	氏　　名
部　長	遠藤　泰彦		

２　令和２年度の診療実績

病理組織診断	4,464 件
（内、術中迅速診断）	118 件
細胞診断	4,373 件
病理解剖	７件
ＣＰＣ開催	年５回
各診療科とのカンファレンス	多数

常勤医師１名、非常勤医師２名、臨床検査技師・細胞検査士６名、医師事務作業補助者１名を含めた構成で業務を行っており、場合によっては東京慈恵会医科大学との連携のもと診断を行うこともある。

※ 過去３年間の診断件数

	平成 30 年度	令和元年度	令和２年度
組織診断 （内、術中迅速診断）	5,024 (158)	5,174 (149)	4,464 (118)
細胞診断	5,154	5,023	4,373
病理解剖	9	10	7

３　令和３年度の目標

病理診断は非常に重要な検査で、特に腫瘍で陽性・悪性を決める場合には最終診断となる。このことは、治療方針の決定、治療効果の評価、および予後判定に重要な意味を持っている。病理医は、常に患者さんとともに病気と健康について考え、最善の医療が提供できるよう心がけている。

（文責　遠藤　泰彦）

■歯科口腔外科

1　スタッフ

役　職	氏　　名	役　職	氏　　名
部長	勝山　直彦	副部長	井出　正俊
医長	大岩　浩気	医員	吉田　稜平

2　令和２年度の診療実績

地域基幹病院の口腔外科として主に難抜歯、外傷、炎症、腫瘍、嚢胞、粘膜疾患、奇形・変形の手術を行っている。当科は、一般開業医では処置困難な症例を扱い、通常の歯科治療は行っていない。

令和２年度全身麻酔または静脈麻酔の症例は 169 例で、外来局所麻酔は 1,937 例であった。

その内訳は、難抜歯が最も多く、ついで嚢胞、外傷の順であった。

手術症例

	平成 30 年度	令和元年度	令和 2 年度
難抜歯	1,903	2,242	1,602
嚢胞	79	123	68
外傷	17	13	5
その他	473	248	262
計	2,472	2,626	1,937

3　令和３年度の目標

今後、地域基幹病院の口腔外科として地域医療機関と密な連携をはかり手術症例を増やしたいと考えている。昨年同様に、顎変形症について、県東部の歯科矯正医との連携をとり症例を増やす予定である。

当院は、富士市で唯一の基幹病院であるため富士市民のために質の高い医療を提供できるよう研鑽・努力していきたい。

（文責　勝山　直彦）

■手術管理科

1　スタッフ

役　職	氏　　名	役　職	氏　　名
部長	良元　和久		

2　令和２年度の診療実績

手術室の安全性や効率性の向上を目指し、手術室全体の運用や診療部の調整、緊急時の対応ができる管理体制を構築した。

・手術件数等は手術室運営委員会の「令和２年度の取組実績」を参照。

・特殊カンファレンスを行い、安全な手術運営を行った。

特殊カンファレンス開催件数

平成 30 年度	令和元年度	令和２年度
3	9	13

3　令和３年度の課題

・他診療部、手術室スタッフと協力し、さらなる手術室の効率で安全な運用を目指す。

・手術医療機器の更新等の見直しを行い、適正な機器の選定、管理を行う。

・手術枠を有効に使用するためにアンケートを行い、定期的に見直す。

（文責　坪井　一人）

■非常勤医師

（令和２年４月１日現在）

所　属	氏　　名	所　属	氏　　名
糖尿病･内分泌･血液内科	谷口　幹太	糖尿病･内分泌･血液内科	比企　能人
消化器内科	中野　真範	内科（内視鏡）	加藤　正之
内科（内視鏡）	内山　勇二郎	内科（内視鏡）	鳥巣　勇一
内科（膠原病）	伊藤　晴康	腎臓内科	川村　哲也
神経内科	高津　宏樹	精神神経科	三宮　正久
精神神経科	野口　百合	循環器内科	谷川　真一
心臓血管外科	田中　圭	心臓血管外科	橋本　和弘
外科（内視鏡）	宮川　朗	外科（呼吸器）	森川　利昭
外科（小児外科）	芦塚　修一	外科（内視鏡）	増田　勝紀
小児科	松岡　諒	外科（女性外来）	神尾　麻紀子
小児科（小児精神）	服部　浩平	小児科（小児発達）	安田　寛二
脳神経外科	武井　淳	脳神経外科	坂本　広喜
脳神経外科	秋山　雅彦	形成外科	西村　礼司
泌尿器科	福岡屋有美奈	泌尿器科	阿部　和弘
泌尿器科	稲葉　裕之	リハビリテーション科	佐々木　信幸
産婦人科	廣中　由紀	産婦人科	金山　尚裕
産婦人科	鈴木　康之	産婦人科	小田　智昭
産婦人科	堀越　義正	放射線科	竹永　晋介
放射線科	白石　めぐみ	放射線科	松井　洋
放射線科	樋口　陽大	放射線科	榎　啓太朗
放射線科	荻原　翔	放射線科	五味　拓
放射線科	長谷川　靖晃	放射線科	野沢　陽介
放射線科	小宮山　貴史	放射線科	濵　瑞貴
皮膚科	清　佳浩	麻酔科	八木　俊
麻酔科	渡邉　薫	麻酔科	越後　憲之
麻酔科	朝香　隆明	麻酔科	内山　敬太
麻酔科	織原　広貴	麻酔科	上村　真央
麻酔科	鷺原　丈諒	麻酔科	佐藤　和貴
麻酔科	清水　啓介	麻酔科	杉本　有基
麻酔科	鈴木　亜沙美	麻酔科	鈴木　聡子
麻酔科	田口　愛	麻酔科	田中　聡一郎
麻酔科	中村　眞人	麻酔科	中村　瑞道
麻酔科	蓮沼　潤	麻酔科	林　宏美
麻酔科	前田　隼	麻酔科	溝口　佳奈

麻酔科	宮﨑　千佳	麻酔科	村井　瑞佳
麻酔科	吉田　朱里	病理科	千葉　諭
病理科	佐々木　祥久	歯科口腔外科	阿部　恵一
歯科口腔外科	森永　桂輔	歯科口腔外科	岡山　浩美
歯科口腔外科	砂田　勝久	歯科口腔外科	小林　清佳
歯科口腔外科	猪股　徹	歯科口腔外科	義隆　伸之
歯科口腔外科	吉田　和正	歯科口腔外科	武田　宗矩

■臨床研修医

氏　　名	採　用　期　間
齋藤　寛大	平成 31 年４月１日～令和３年３月 31 日
佐藤　匠	平成 31 年４月１日～令和３年３月 31 日
増田　有亮	平成 31 年４月１日～令和３年３月 31 日
町野　孝行	令和元年７月１日～令和３年３月 31 日
森本　宇	平成 31 年４月１日～令和３年３月 31 日
劉　文翰	平成 31 年４月１日～令和３年３月 31 日
飯塚　敬太	令和２年４月１日～令和４年３月 31 日
植田　豊作	令和２年４月１日～令和４年３月 31 日
風見　健太	令和２年４月１日～令和４年３月 31 日
去川　裕基	令和２年４月１日～令和４年３月 31 日
福田　健太	令和２年４月１日～令和４年３月 31 日
藤井　友音	令和２年４月１日～令和４年３月 31 日

■臨床検査科

1　スタッフ

役　職	氏　　名	役　職	氏　　名
嘱託診療参事	千葉　博胤	嘱託診療参事	三川　秀文
技師長	石川　隆之	副技師長	鈴木　雅人
副技師長	鈴木　英昭	副技師長	渡邉　由喜子
参事補兼主任	岩崎　佐知子	参事補兼主任	小野　美代子
参事補兼主任	長峰　誠一郎	主任	渡邉　広明
主任	佐野　僚子	主査	遠藤　聡
主査	石井　孝良	主査	山本　純子
主査	大野　真一	上席技師	清　亜矢
上席技師	手老　真弓	上席技師	阿部　愛
上席技師	尾形　裕以	上席技師	栗原　有紀子
上席技師	内野　有子	上席技師	竹下　翔太
技師	池田　琢	技師	後藤　理紗
技師	外山　卓矢	技師	柏木　里沙子
技師	大野　成美	技師	森田　合莉
技師	青木　結	技師	鈴木　梓紗
臨時職員	加藤　加代子	臨時職員	宇佐美　由紀子
臨時職員	中山　智美	臨時職員	左原　泰子
臨時職員	後藤　敦也	臨時職員	渡邉　修
臨時職員	野田　文子	医療補助員	望月　紅野
BML 事務員	原　久美		

2　令和２年度の業務実績

	平成 30 年度	令和元年度	令和２年度
生化学検査	2.093.816	2.081.983	1,819,718
血液検査	318.934	318.619	276,195
一般検査	83.449	88.520	80,480
輸血検査	32.506	34.184	28,807
生理検査	33.407	32.441	26,627
病理検査	11.314	11.065	9,625
細菌検査	41.667	40.992	33,588
採血患者数	68.464	67.317	59,185
剖検数	9	10	7

・新型コロナウイルス検査の増加に伴い、抗原定量検査としてルミパルス G1200Plus PCR 検査として GeneXpert GX-Ⅳ(2 台)、AutoAmp の計４台を購入し多検体の処理にあたった。
・日本医師会、静岡県医師会、日本臨床衛生検査技師会主催の外部精度管理調査に参加した。基準範囲を満たし適正な管理体制であることが評価された。
・検査データの質的向上に取り組み日本臨床衛生検査技師会精度保証施設の認定を更新した。
・心臓リハビリテーションを開始するにあたり、CPX（心肺運動負荷試験）検査として MLX-1000Mulex、Cpex-1 を購入した。
・ALP、LD の現行測定法を国際臨床化学連合（IFCC）の示す基準測定操作法に変更した。

＜各種認定等資格取得者状況＞

名称	人数	名称	人数	名称	人数
細胞検査士	６名	認定輸血検査技師	１名	認定血液検査技師	４名
認定一般検査技師	１名	認定超音波検査士	５名	生殖補助医療胚培養士	２名
体外受精コーデイネーター	１名	日本糖尿病療養指導士	５名	心臓リハビリテーション指導士	１名
緊急臨床検査士	４名	健康食品管理士	１名	未病専門指導師	１名
認定心電検査技師	１名	栄養サポートチーム療法士	１名	認定病理検査技師	２名

３　令和３年度の目標

・臨床や他部門からの様々な要望に応えるため、認定資格取得に向けて挑戦できるような職場環境作りを心がけ、人材育成や業務の見直しを行っていく。
・診療部、看護部、事務部、診療技術部との密な連携を図り、様々な意見、課題に応えながらチーム医療とタスクシフティングに貢献していく。
・迅速で正確な検査結果の報告が行えるよう、精度管理の向上とシステム・分析装置の整備に努め、精度保証認定施設維持と信頼される検査データの提供に努める。
・感染防止に向けた院内への情報発信と検体採取の技術を活用する。

（文責　鈴木　雅人）

■中央放射線科

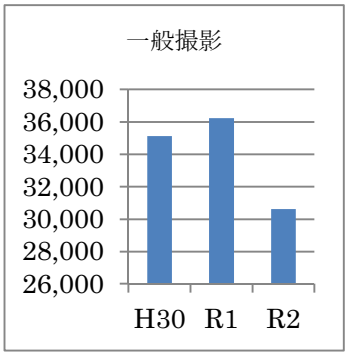
１　スタッフ

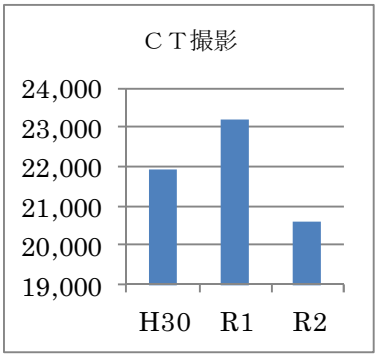
役職	氏名	役職	氏名
技師長	遠藤　佳秀	副技師長	杉山　伸一
副技師長	遠藤　一弘	副技師長	菅原　和仁
参事補兼主任	鍋島　雄和	参事補兼主任	稲垣　伸一
主任	鈴木　和訓	主任	岡田　和教
主任	澤口　信孝	主査	清水　則雄
主査	酒井　理香	主査	大森　知枝
主査	猪股　崇亨	主査	鈴木　浩之
主査	秋田　真弓	上席診療放射線技師	太田原　絢子
上席診療放射線技師	神田　直樹	上席診療放射線技師	岡根谷　侑
上席診療放射線技師	増田　裕司	診療放射線技師	三日市　憲治
診療放射線技師	大野　純希	診療放射線技師	鈴木　健太郎
診療放射線技師	池谷　桃子	診療放射線技師	塩﨑　博人
診療放射線技師	笹山　陽一郎	専門員（医療機器管理室室長）	井出　宣孝
医療事務員	中村　明日香	医療事務員	高橋　純子

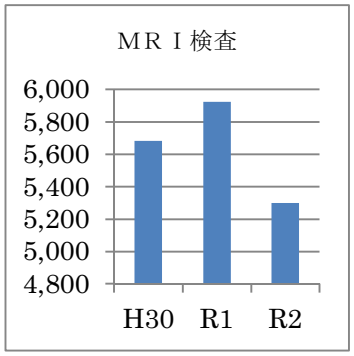
２　令和２年度別の業務実績　（単位：人）

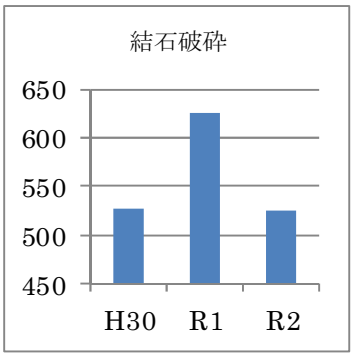
	平成 30 年度	令和元年度	令和２年度
一般撮影	35,130	36,236	30,622
乳房撮影	418	375	334
ポータブル撮影	12,567	11,023	8,724
心臓カテーテル検査	1,104	1,153	927
その他血管造影	188	221	183
ＣＴ撮影	21,924	23,221	20,580
ＭＲＩ検査	5,683	5,923	5,299
アイソトープ	870	965	799
骨塩定量	717	731	733
TV 撮影	1,586	1,454	1,385
結石破砕	527	626	525
放射線治療	3,573	3,158	3,437
口腔外科撮影	2,854	2,877	2,374
超音波検査	7,019	7,459	6,795
画像ファイリング	7,678	8,298	7,131

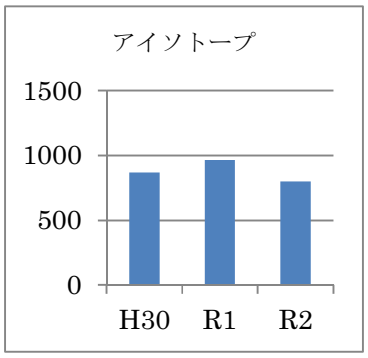
妊婦検診	1,813	1,095	928
病診連携	1,871	1,905	1,307

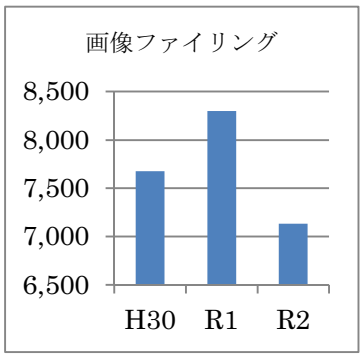












- コロナ禍にて、年度後半から患者数減少がみられ、前年度に比べ大半の検査人数の減少がみられる。
- 放射線治療においては治療医が常勤となり、検査数増加がみられた。また IMRT 稼動にあたり今後更なる検査数増加がみこまれる。
- 骨塩定量検査では消化器内科依頼の検査人数が定着している。

3　令和３年度の目標

当科は更新間近な高額医療機器が複数存在しているため、計画的な更新ができるよう関係各所に働きかけ、装置の充実を図れるよう努力する。

複数のモダリティーに対応できる人材育成を行う。

感染防御や接遇の体制強化を図る。

令和３年度　中央放射線科目標

「患者さんや地域のニーズに合った医療を提供する」

技術の向上と知識の習得を目指し自己研鑽に努め、患者さんや当院スタッフ、他院からの信頼が得られるよう安心安全な医療を提供する。

（文責　杉山　伸一）

■臨床工学科

1　スタッフ

役　職	氏　　名	役　職	氏　　名
参事補兼主任	池谷　幸一	主査	佐野　達哉
主査	勝間田　賢	主査	諏訪部　新
上席臨床工学技士	杉山　弘一	上席臨床工学技士	平柳　圭佑
臨床工学技士	佐野　汐里	臨床工学技士	山口　智也

2　令和２年度の診療業務実績

	令和元年度	令和２年度
透析業務（透析、アフェレーシス、腹水濃縮）	2,810	2,757
中央管理機器貸出業務	4,595	4,644
中央管理機器点検およびメンテ	1,356	1,147
病棟および外来のラウンド点検	1,149	1,315
手術室業務（人工心肺、セルセーバー、メンテ）	350	329
心カテーテル業務（CAG、PCI、PTA 等）	1,605	1,191
心アブレーション	53	58
ペースメーカー業務（外来、手術室）	862	809
ICU 業務（CHDF、PCPS、IABP）	286	212
計	13,066	12,462

ME 機器　教育研修実績

	平成 30 年度	令和元年度	令和 2 年度
中央管理 ME 機器勉強会	46	78	42
ICU・手術室 ME 機器勉強会	4	10	5
計	50	88	47

・病院機能評価結果の指摘事項である「初動チェックを適切に行うための写真入りマニュアル」について、各病棟に配布されている呼吸器関連ファイルの人工呼吸について作成した。また、「人工呼吸器チェックリスト記入方法」「小児用人工呼吸器チェックリスト（ハミルトン）記入方法」の改訂を行った。

・新型コロナ感染症の透析患者に対応するため、週最大４名の受け入れシフトを組み業務にあたった。

・教育研修実績として中央管理 ME 機器勉強会を年 47 回行った。

＜各種認定資格取得者状況＞

認定団体	名称	人数
公益財団法人医療機器センター	透析技術認定士	3
3 学会（一般社団法人 日本胸部外科学会、一般社団法人 日本呼吸器学会、公益社団法人 日本麻酔科学会）	呼吸療法認定士	4
日本人工臓器学会	体外循環技術認定士	2
心血管インターベンション治療学会	心血管インターベンション技士	1
厚生労働省	日本 DMAT	1

3　令和３年度の課題

本年度は、新型コロナ感染症対策として徹底した感染症予防を実施し、コロナ感染症の透析患者について対応した。今後予想される第４波・５波にも臨機応変に対応していきたい。また、新型コロナ感染症の影響で資格認定試験が軒並み中止となったが、スタッフが既に取得済みの呼吸療法認定士、透析技術認定者、体外循環技術認定士、心血管インターベンション技士等の各資格は維持するとともに、次年度は呼吸療法認定士を全てのスタッフが取得することを目標とした。

心臓カテーテルアブレーション業務は、通年に渡り実施され、今後も治療件数の増加が見込まれる。臨床業務では高度な知識が求められることから、スタッフの育成に力を入れていきたい。

来年度４月から新規事業として「ペースメーカーのリモート診断」が開始される。ペースメーカー患者の遠隔モニタリングによる安心安全な管理体制を実践していく。

医療機器管理では、「人工心肺装置および補助循環装置」「人工呼吸器」「血液浄化装置」「除細動装置」「閉鎖式保育器」「シリンジ・輸液ポンプ」等ににについて定数管理を徹底し、機器の購入から保守までを効率的に行い「安心安全な医療技術の提供」をより前進させていきたい。

（文責　池谷 幸一）

■リハビリテーション科

1　スタッフ

役職	氏名	役職	氏名
副技師長（作業）	中村　公美	主任(理学)	深澤　史朗
主査（作業）	竹川　圭亮	主査(言語)	幾嶋　邦人
上席理学療法士	小田　純市	上席理学療法士	山田　将史
上席理学療法士	鈴木　智乃	上席理学療法士	高橋　良太
上席理学療法士	若月　優	上席作業療法士	渡邉　亜希子
上席作業療法士	大原　弘樹	上席作業療法士	中嶋　信夫
上席言語聴覚士	石井　玲奈	上席言語聴覚士	佐野　弘美
理学療法士	永嶋　泰玄	理学療法士	梅原　健人
理学療法士	石川　大喜	理学療法士	今瀬　謙
理学療法士	三國　雄河	作業療法士	杉山　かなた
作業療法士	岡本　まなみ	言語聴覚士	宮川　真理子
言語聴覚士	古木　朋世	事務補助員	田中　住弥

2　令和２年度の業務実績

・リハビリ実施単位数は本年報の別ページ【リハビリテーション実施状況】を参照。

・令和２年度のリハビリ依頼件数は 2019 件（入院 1884 件・外来 135 件）で、新型コロナウイルス感染症による入院患者数の減少及び「リハビリ対象患者の選択と集中」に対する取り組みを行ったこともあり、令和元年度よりも 333 件減少した。

＊「リハビリ対象患者の選択と集中」：必要性の高い患者へのリハビリを充実させるために、「廃用症候群患者のリハビリ適応基準」の見直しを行った。

・リハビリ依頼の約９割を入院患者が占め、疾患別リハビリの割合は運動器疾患 30.4%、廃用症候群 24.1%、呼吸器疾患 19.2%、脳血管疾患 18.7%で、令和元年 10 月に新設した心大血管疾患は 7.7%だった。令和２年度より言語聴覚士が呼吸器リハビリの算定可能となったことに加え、「廃用症候群患者のリハビリ適応基準」の見直しを行ったこともあり、廃用症候群患者の割合は大幅に減少した。

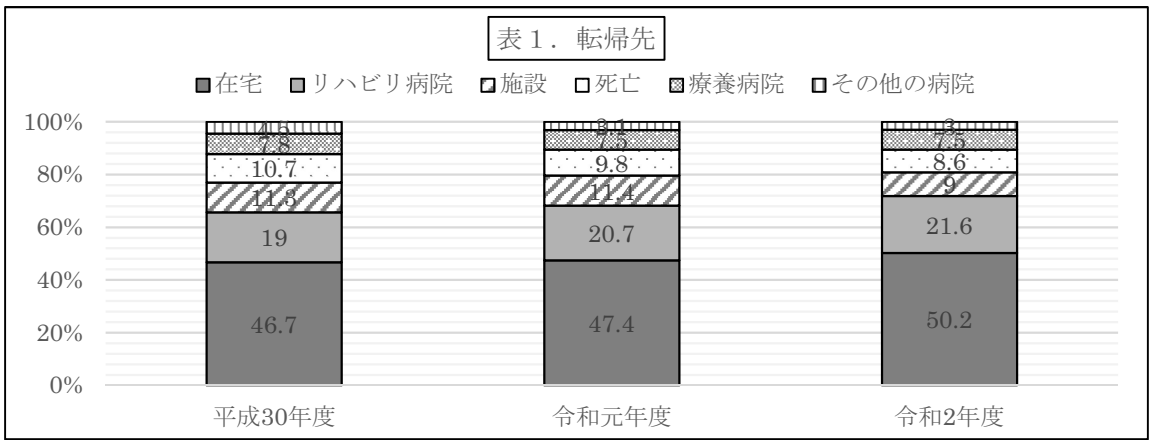
・退院先の傾向は平成 30 年度からの３か年でほぼ同じで、在宅・リハビリ病院転院となる患者が全体の７割以上となっている。（表１．転帰先）

・リハビリ依頼からリハビリ開始までは 1.05 日（令和元年度 1.74 日）だったが、新型コロナウイルス感染症の院内感染によりリハビリ中止の影響を受けた 12・１月を除くと 0.87 日であった。

・リハビリ開始前後の FIM 改善値は平均 17.7 点（令和元年度 16.3 点）だった。

・４Ａ病棟、４Ｂ病棟を除く全病棟の病棟カンファレンス(週に１回以上)に参加した。

・ICU 入室患者に対しては、毎朝の多職種カンファレンス及び非常勤リハビリ専門医の診察を実施し、安心で安全な早期介入を進められるようにした。
・新型コロナウイルス感染症患者へのリハビリ介入を行った。
・患者・家族・ケアマネージャー等とのカンファレンス（リハビリ場面の見学も含め）は適宜行ったが、令和２年度は新型コロナウイルス感染症の感染対策による面会制限のために頻度は例年より少なかった。
・褥瘡・NST（栄養・摂食嚥下口腔ケア）・緩和ケアの回診に参加した。
・スタッフ間の治療技術・知識共有を図るためのリハビリテーション科勉強会も後期は院内感染の影響もあり、中止となった。
・看護学校の講師、公害予防事業の講師、市民向けの出前講座５回（骨折と転ばぬ為の身体づくり：２回、認知症予防：３回）を行った。
・院内では、病棟・他部門に対して、「ポジショニング」「病棟で行えるリハビリ」「移乗動作の介助方法」「人工股関節置換術後のリハビリ」をテーマに講義を行った。



３．令和３年度の目標
・令和２年度から取り組んだ「リハビリ対象患者の選択と集中」については、来年度以降も継続していく。
・新型コロナウイルス感染症に対する感染対策の一つとして病棟担当制を導入したが、スタッフのフロア間移動の減少に伴う効率改善効果や多職種連携の推進も図れたため、来年度も進めていきたい。
・令和３年度のリハビリ科目標を「チームの力で高める技術　進める早期リハビリ」とし、具体的な目標として「リハビリ依頼（受付日）からリハビリ開始までの日数：１日未満」「入院患者への提供単位数：1.65 単位」「退院時指導料算定率：85%」と定めた。
・休日リハビリ導入について検討するために、来年度は９回の休日リハビリの試験的実施を予定している。
・各回診への参加・学術研究・勉強会・出前講座等の講師は今までどおりに行っていく。

（文責　中村　公美）

■栄養科

１　スタッフ

役　職	氏　　名	役　職	氏　　名
主任（管理栄養士）	小俣 朋子	上席栄養士	古郡 朝子
栄養士	田中 ゆりの	栄養士	金指 麻衣
栄養士	谷津倉 融依		

２　令和２年度の業務実績

（１）給食管理業務

・献立作成・発注・検収・材料仕込み・調理・盛り付け・配膳・下膳・食器洗浄の一連の給食管理業務は、平成 10 年度より全面委託となっている。

・箸・スプーン及びマグカップの配膳に対し、返却数・破損状況の把握として、毎月第２土曜日の昼食後に数量確認、定数管理を行い不足分は補充購入とした。

・献立会議を毎週火曜日に委託側スタッフと共に開催し、検食時の所見を考慮した改善策を協議。また嗜好調査を年４回、一般食・常食喫食者を対象に実施。調査結果を踏まえて改善策を講じ献立には季節感や年間 20 回程度の行事食も取り入れ、よりよい食事提供ができるよう努めた。

・産科食は朝・昼・夕の３食、その他一部の食種（一般食・常食・軟飯食・全粥食高血圧食・塩分６ｇ制限食・学童食・学食）については朝・夕の２食を選択メニューで対応し、選択メニュー加算（１食 17 円追加）を実施した。

・小児アレルギー負荷試験の対応として、卵・乳・小麦に対する食物負荷試験食の提供を行うことにより、小児アレルギー食の個別栄養指導件数も増加している。

・産後ケア事業の対応として、入院実績ではないが常食の提供を行い対応している。

（２）栄養管理業務

・全入院患者の栄養管理状況の把握として、栄養管理計画書の作成が必須となっているため、栄養管理計画書を毎日作成し、年間作成患者数は 21,628 件となった。

・栄養サポートチーム加算算定には、NST 専任職員として管理栄養士が担当しているまた、NST 回診、嚥下・口腔ケア回診、褥瘡回診にも参加（回診実績は別紙参照）し、チーム医療の活動を通して多職種との連携を強め、より患者個々に応じた食事内容、栄養計画の作成、栄養評価が可能となった。

・NST 活動を通じて他職種のスタッフとの連携が円滑に行われ、他部門との関わりとしての講師依頼も出された。

・集団栄養指導は、腎臓病教室（腎臓病と食事）は年２回実施予定であったが今年度は３月のみ実施できなかった。

・個別栄養指導の業務実績は以下のとおりである。

表）個別栄養指導件数の推移と指導内容の内訳

	平成 30 年度	令和元年度	令和２年度
個別栄養指導件数	819	904	739
栄養指導内容　内訳（件数）			
1	糖尿病及び合併症（203）	糖尿病及び合併症（312）	糖尿病及び合併症（243）
2	CKD 及び透析（133）	CKD 及び透析（131）	CKD 及び透析(117)
3	心臓・高血圧（107）	心臓・高血圧（97）	心臓・高血圧（99）
4	妊娠糖尿病（82）	妊娠糖尿病（56）	妊娠糖尿病（83）
5	消化管切除術後食（65）	消化管切除術後食（45）	嚥下食（37）

＊糖尿病及び合併症にはⅠ型糖尿病・糖尿病性腎症も含む。

・次に消化管切除術後食・小児アレルギー食・脂質異常症食・学童食・幼児食・離乳食と件数が続き、例年と比較すると、小児科分野での栄養指導件数も増加した。

（３）実習生の受け入れ及び講師依頼

・日本短期大学、中部大学、東海学園大学からの実習受け入れを実施。

・市立看護専門学校１年生の栄養学（調理実習も含）の講師を担当。

・職業講話、病棟勉強会（嚥下食）の講師を担当。

３　令和３年度の目標

（１）NST 回診を通じて他部門との連携を強化し、病棟訪問も視野に入れ患者個々に応じた栄養管理の実践に努める。

（２）今後も経腸栄養剤や栄養補助食品等の見直しや検討を行い栄養管理に努めていく。

（３）栄養管理業務を実施する上で医療に関わる一員として、学会やセミナーに参加し認定資格の取得・保持することでより専門性を高めていくとともに、人材育成としても　“認定専門資格(＊)の取得”を目指す。

＊認定専門資格：

NST 専門療法士・TNT-D 認定管理栄養士・日本糖尿病療養指導士（CDEJ）

病態栄養認定管理栄養士・がん病態栄養専門管理栄養士・腎臓病療養指導士・高血圧・循環器病予防療養指導士・日本摂食嚥下リハビリテーション学会認定士　など

（文責　　小俣　朋子）

■医療技術科

1　スタッフ

役　職	氏　名	役　職	氏　名
参与補兼主任 （視能訓練士）	平岩　弘子	主査（歯科衛生士）	北澤　美幸
上席視能訓練士	佐々木　麻理子	主査（歯科衛生士）	長橋　あゆみ
視能訓練士	齋藤　夏菜	歯科衛生士	梅原　未希
歯科衛生士	山口　千裕	歯科衛生士	矢部　晴菜
歯科衛生士（R）	加藤　恵美子	歯科衛生士（R）	葉山　綾

2　令和２年度の業務実績

(1) 視能訓練士

- 視機能検査（表１参照）
- 視能矯正　（表２参照）
- ロービジョンケア（表３参照）
- 健診業務（脳ドック）（表４参照）
- 月、火曜日の午後、手術室にて眼科手術介助を行っている

表１　（件数）

	平成 30 年度	令和元年度	令和２年度
矯正視力検査・眼鏡処方・屈折検査	8357	8303	8141
角膜曲率半径測定・形状解析	1455	1515	1267
角膜内皮細胞顕微鏡検査	747	758	628
（静的・動的）量的視野検査	1272	1311	1124
両眼視機能検査・眼筋機能検査	142	302	348
眼底検査（三次元解析・画像撮影・造影検査）	2917	2921	2554
超音波検査（Aモード・断層）	216	197	166
中心フリッカー	124	140	124
色覚検査（定量式・パネル D-15）	12	22	22
電気生理検査	3	4	0
オルソケラトロジー	6 人	6 人	2 人

表２　（件数）

	平成 30 年度	令和元年度	令和２年度
理学　斜視・弱視視能訓練	105	95	82

表３　（人数）

	平成 30 年度	令和元年度	令和２年度
ロービジョン外来	2	1	1

表４　（人数）

	平成 30 年度	令和元年度	令和２年度
脳ドックにおける眼底撮影	40	32	26

(2) 歯科衛生士

① 歯科口腔外科における外来業務

- 外来診察のアシスタント
- 外来外科手術の介助、準備、片付け、
- 障碍者・有病者に対する外来歯科診療補助（全身麻酔下の診療補助も含む）
- 全身麻酔下における外科処置のアシスト
- 麻酔科診察時におけるアシスト、患者説明、検査データ確認

② 口腔ケア・周術期口腔ケア

	平成 30 度	令和元年度	令和２年度
口腔ケア依頼件数	500	176	146
周術期口腔ケア依頼件数	273	57	51
合　計	773	223	197

③その他

- 富士市立看護専門学校の講師
- 専門学校中央医療健康大学校より６名の実習生の受け入れ
- 日本歯科衛生士会、認定歯科衛生士研修会への参加
- 栄養サポートチームへの参加
-

＊認定専門資格

認定視能訓練士

視能訓練士実習施設指導者

在宅療養指導、口腔機能管理、医科歯科連携　口腔機能管理

３　令和３年度の目標

(1)　視能訓練士

- 安全な環境作りや連携のためのシステムを構築し運用していく。
- 知識と技術を向上させ認定視能訓練士の維持と取得、またそのための環境作りや人材育成を目指したい。

(2) 歯科衛生士

- 口腔外科外来の診療を円滑に行うために歯科衛生士業務の専門性を確立する。
- 歯科衛生士連絡表を活用し地域医療と連携する。
- 委員会への参加、勉強会、出前講座、看護学校の講師を継続して行う。
- 口腔ケアを通じチーム医療に貢献する。

（文責　平岩　弘子、長橋　あゆみ）

■薬剤科

1　スタッフ

役　職	氏　　名	役　職	氏　　名
薬剤科長	加藤　寛史	副薬剤科長	渡辺　浩臣
参事補兼主任	大滝　哲也	参事補兼主任	三澤　延司
主任	望月　保子	主任	川口　敬
主任	佐藤　実香	主査	木元　慎一郎
主査	阿部　一仁	主査	柴田　貴子
主査	岩本　一徳	主査	松田　佑平
主査	飛澤　香奈	主査	後藤　和美
上席薬剤師	小林　正典	上席薬剤師	池田　嘉隆
上席薬剤師	小坂　裕介	上席薬剤師	木村　佳弘
上席薬剤師	遠藤　大介	薬剤師	鈴木　岳瑠
薬剤師	藤井　文音	薬剤師	高橋　杏奈
薬剤師	本多　大樹	薬剤師	仁藤　裕也
医療補助員	大箸　悦子	医療補助員	伊東　江里
医療補助員	奥山　ともみ	医療補助員	望月　比呂子
医療補助員	鈴木　千智世～10 月	医療補助員	村越　千絵 11 月～

2　令和２年度の業務実績

	平成 30 年度	令和元年度	令和２年度
薬剤管理指導料１　380 点	5,949	6,322	5,544
薬剤管理指導料２　325 点	8,216	8,033	7,323
退院時薬剤情報管理指導料　90 点	2,793	2,732	2,296
無菌製剤処理料１－イ 180 点	2,125	1,768	1,620
無菌製剤処理料１－ロ 45 点		824	811
無菌製剤処理料２　40 点	499	901	560
特定薬剤治療管理料２　100 点	173	287	317
持参薬鑑別	7,719	8,370	7,018
持参薬再調剤	8,227	9,677	7,920
TDM 解析	546	546	466
院内製剤　　クラスⅠ	47	33	19
クラスⅡ	584	240	178
クラスⅢ	58	408	259
院外処方せん疑義紹介	2,809	2,814	2,527

注射薬個別払出し	319,982	314,329	251,916

・新規治験を２件実施した。

資格取得一覧

認定団体	名　称	人数
日本病院薬剤師会	感染制御認定薬剤師	1
	病院薬学認定薬剤師	5
日本薬剤師研修センター	認定実務実習指導薬剤師	7
	小児薬物治療認定薬剤師	1
日本静脈経腸栄養学会	栄養サポートチーム専門療法士	1
日本糖尿病療養指導士認定機構	日本糖尿病療養指導士	1
日本腎臓病協会	腎臓病療養指導士	3

３　令和３年度の目標

病棟薬剤業務実施加算の推進に取り組む。

・薬剤管理指導料の算定件数の確保

・病棟間格差の是正方法の検討（標準化・日報）

医薬品在庫管理の適正化に取り組む。

・医薬品在庫額の削減を図る

・デッドストックの有効期限切れによる廃棄の削減

・注射薬の適正な管理を検討する

薬剤師の質的向上を目指し、さらなる自己研鑽に取り組む。

・各種専門・認定薬剤師資格の獲得

・自己研鑽推進に向けた学会、研修会等の参加の検討

（文責　加藤　寛史）

■看護部長室

1　スタッフ

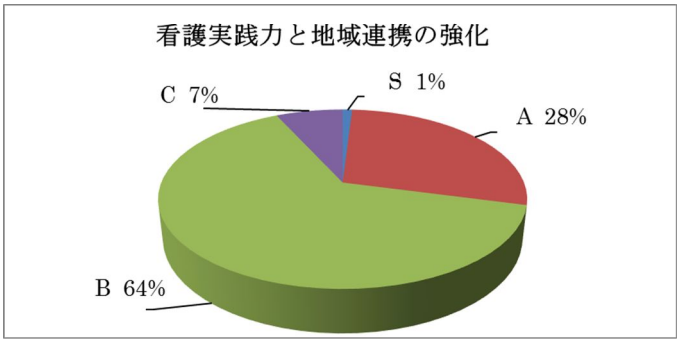
役　職	氏　　名	役　職	氏　　名
副院長兼看護部長 （日本看護協会認定看護管理者）	伊藤すみ子	副看護部長（総務担当）	勝又千壽子
		副看護部長（教育担当）	野澤里美
		看護補助者	白井美登里

2　所属の特色

看護部長室には、副院長兼看護部長と２名の副看護部長、事務を担当している看護補助者の計４名が在籍している。スムーズな看護部組織運営のため、副看護部長は総務担当と教育担当に業務を分担している。看護部長室は必要な情報を的確かつ迅速に看護長へ伝達するとともに、看護長からの報告も徹底され問題解決に向けた対応をしている。

3　令和２年度の目標及び評価

目標「看護実践力と地域連携の強化」



＜達成度評価＞

S：目標を大きく上回った

A：目標を期待以上に上回った

B：目標を達成した標準的な成果

C：明らかに下回った

行動目標

1）専門知識・技術に基づいた看護の実践

・院内研修、病棟勉強会で一人 12 回（目標値 8 回以上）受講できた

・e-ラーニング受講 398 講義（目標値 200 以上）受け伝達講習や実践に活かした

・NCPR シミュレーションを 31 回実施、気管内挿管・PI カテーテル・沐浴などのシミュレーションを 30 回実施した

・看護を語る会は、スタッフ全員が実施でき、知識・技術を深めた

・褥瘡ケアカンファレンスを週１回実施し、ハイリスク患者の看護計画の評価を行い、ケアを実施し発生率 0.54%（目標値 1%以下）と改善ができた

・滅菌物定数の見直しを行い日切れが、病棟では 40%、外来では 60%減少できた

・書類間違いのリスクが 15%（目標値 20%以下）に減少した

2）看護倫理に基づいた接遇の実践

・プレパレーション（小児の発達に応じた説明や対応、配慮）15 件、患者参加型カンファレンス５件実施

・倫理カンファレンス・デスカンファレンスを 30 回実施
・倫理４分割法の勉強会を４回実施
・認知症ケアカンファレンス 123 件実施し抑制や排泄等人間の尊厳について共有
・身体拘束の割合を６％（目標値 13%以下）、9.4%（目標値 20%以下）に減少
・褥瘡新規発生率 0.2%（目標値 0.8%）、0.1%（目標値 0.5%）に改善
・手指消毒剤使用が前年同月より 38.7%上昇し感染対策への意識向上に繋がった
・病棟カンファレンスに訪問看護師が参加し新規患者 59 名を訪問看護に繋げた

３）地域と連携した看護の実践

・210 件のサマリーを地域に送付し、基準に沿って 100%作成した
・在宅復帰率 91.4%（目標値 90%以上）、他職種カンファレンス 44%（目標値５％以上）で目標達成できた
・患者参加型カンファレンスを 31 回実施した
・「お困りごと相談」月 46.6 件（目標値月 20 件）、そのうち「意思決定支援」月 7.6 件であり、事例を共有し患者・家族に寄り添った看護ができた
・退院ケアカンファレンス週２回を年間通し継続できた
・特殊手術カンファレンス 11 件、心臓血管外科手術カンファレンス 10 件参加し、安全な手術に繋げた

４　業務実績

	で　き　ご　と
４月	昇任　副看護部長２名(教育担当､センター長兼室長)看護長４名　副看護長７名　主任８名　主査 15 名 ・新型コロナ感染症病床は３Ｂ病棟 30 床稼働開始（３Ｄ病棟担当者は３Ｂから選出） ・看護部職員 637 名出勤時体温測定実施し有熱者は出勤停止を実施 ・新採用者は市役所の全体オリエンテーション中止、各所属施設で実施となる ・看護部研修は新人研修と看護研究教室は実施。その他はｅラーニング中心に企画 ・３Ｄ病棟満床となる（小児を含め７人入院） ・全診療科入院制限及び緊急性のない手術の延期が決定 ・しらゆり寮３階看護師休憩の部屋とし、ソファベット３台設置 ・23 日富士市長・副市長３Ｂ、３Ｄ病棟視察 ・27 日より外来患者全員の検温開始（５月末までまちづくりセンター等の協力あり） ・皮膚・排泄ケア特定認定看護師外部の訪問診療医師と同行訪問開始
５月	・１日より３Ｂ病棟感染病棟 11 床となる。３Ｄ病棟は疑似症患者４床稼働となる重症室２床 ICU 管理の３部署となる ・３Ｄ入院中の患者は透析後退院し、３Ｄ病棟を業者により消毒する ・12 日看護の日、ナイチンゲール像とポスターのみ展示

	・23 日令和３年度採用試験 23 人募集 47 人応募有（内 10 人推薦）32 名採用
6 月	・２日静岡県健康福祉部　医療局長、疾病対策課長、地域医療課技監、富士保健所長保健師５名　３Ｂ病棟視察 ・５日３Ｂ病棟パーテーション撤去（陰圧個室 3 床は疑似症患者入院用に確保） ・15 日より３Ｂ病棟感染病棟解除（一般患者 30 床　コロナ患者は３Ｄ使用）
7 月	・コロナ対策として３Ｂ病棟４人夜勤とし４Ｂ病棟５人夜勤から１名３Ｄ病棟に応援 ・定期異動７月実施（コロナの為６月実施施せず） ・「せん妄ハイリスク患者ケア加算」の算定開始 ・インターンシップ
8 月	・コロナ対策として３Ｂ病棟 37 名５人夜勤とし、各病棟から主任、副看護長 11 名の日勤応援とする ・ICU2 床陰圧工事しコロナ感染症受け入れ可能となる（２床） ・静岡県コロナ感染症重点病院となり３Ｂ病棟感染症病棟とする（18 床） ・インターンシップ（７名） ・３Ｄ病棟トイレ工事（洋式トイレに改修）
9 月	・３Ｂ病棟 10 名の異動実施 ・インターンシップ（４名） ・ICU ゾーニングに関し湖山病院名誉院長小野寺先生に視察を依頼し来院 ・４Ｂ病棟 10 床成人女性入院開始の為「小児入院医療管理料４」に下げる
10 月	・3B 病棟８名の異動実施 ・静岡県立看護専門学校　助産学科 2 名実習（９月 28 日～12 月 14 日） ・主任会（コロナ禍の中、主任の役割を明確にする） ・合同会議（コロナ禍で管理者として考え行動したこと）
11 月	・がんセンターCN 実習受け入れ（２名）11 月 19 日～12 月 19 日
12 月	・ICU コロナ患者の受入れの為、各病棟６名程度休床とし、ICU へ４名、3B 病棟へ５名の看護師の移動を行う ・7B 病棟にて COVID-19 クラスター発生し病院の緊急事態宣言発出（24 日） 4B 病棟 NICU のみ稼働、小児の入院は 4A 病棟へ。5B 病棟休床、その他の病棟 35 床稼働とし、感染症病棟への看護師の応援を実施。看護学生の実習受入れ停止 ・認定看護師課程「救急看護」山田順一、「緩和ケア」櫻井直美、「認知症ケア」島津健太・持田結香 4 名が取得 ・「認知症ケア加算 2」取得開始
1 月	・緊急事態宣言解除（18 日） ・コロナクラスターの終息宣言（30 日） ・令和３年度２次採用試験（17 日）４名応募　３名採用　計 35 名の採用が決定

２ 月	・看護学生の受入れ、実習開始（17 日） ・４Ｂ病棟一般床 24 床で受け入れ開始(１日) ・５Ｂ病棟 24 床で受け入れ開始(９日)
３ 月	・静岡県看護連盟より「清輝雛」の寄贈を受ける ・医療従事者用の新型コロナワクチン　コミナティ１回目接種開始（５日間） ・看護部総会開催できず、書面を持って承認を得る（資料 23 日配布）

＊日本看護協会認定看護師　11 領域 16 名

認定看護管理者	伊藤すみ子（H30）
感染管理	本間功武（H25）
救急看護	山田順一（R2）
集中ケア	★佐野世佳（H26）
手術看護	望月久子（H19）松下賀津江（R1）
皮膚・排泄ケア	★若林久美子（H22）吉崎美帆（H28）
がん化学療法	村松由貴子（H18）
緩和ケア	池田康恵（R1）櫻井直美（R2）
慢性呼吸器疾患看護	加藤美奈子（H24）
認知症ケア	持田結香（R2）島津健太（R2）
訪問看護	村松和歩（H24）加藤浩子（R1）

＊院内認定看護師　１名

退院調整	赤堀崇代（H25）

★特定行為研修終了者　２名

若林久美子（H30）：創傷管理関連・創部ドレーン管理関連、栄養及び水分管理に係る薬剤投与関連

佐野世佳（R1）　：呼吸器（気道確保に係るもの）関連、呼吸器（人工呼吸療法に係るもの）関連、動脈血液ガス分析関連、栄養及び水分管理に係る薬剤投与関連、循環動態に係る薬剤投与関連

５　令和３年度の看護部目標

「根拠に基づいた看護実践と看護でつなぐ地域医療」

行動目標　１）自ら専門知識と技術を学ぶ

２）感染対策を強化し安全な療養環境を提供する

３）地域医療に貢献できる看護を提供する

（文責　勝又　千壽子）

■外来

1　スタッフ

役　職	氏　名	役　職	氏　名
看護長	秋山　ゆかり	看護長	渡邉　かおる
参事兼副看護長	田島　眞弓	参事兼副看護長	白井　さつき
副看護長	戸塚　美晴	副看護長	若本　奈緒美
副看護長	遠藤　喜巳子	副看護長	前島　良子
副看護長	小林　宏美	副看護長	芦川　牧子
副看護長(認定)	村松　由貴子	副看護長(認定)	若林　久美子
主任(認定)	吉崎　美帆	主任	仁藤　伸代
主任	小澤　花子	主任	佐野　かなえ
主任	高橋　礼子	主任	松山　桃代
看護師	63 名	准看護師	７名
看護補助者	48 名		

2　所属の特色

外来は 23 の一般外来と、通院治療室・人工透析室・内視鏡室・放射線科・救急外来で構成されている。内視鏡・放射線科では予定されていた検査・治療以外に、夜間休日など緊急時にも対応できる体制となっている。令和２年度は、内視鏡検査・治療 4340 件、放射線科では心臓カテーテル検査・治療 1046 件、その他血管造影 184 件が行われた。また、救急外来では、地域の二次・三次救急を 24 時間体制で受け入れている。そのため、専門知識・技術に基づく安全な医療が安心して受けられるよう努めている。

3　令和２年度の目標及び評価

外来ＡＢＣ「看護実践力を高め、患者・家族の思いを尊重した地域連携を強化する」

１）倫理勉強会やｅラーニングの活用・防災シミュレーション・患者誤認シミュレーションを実施し専門知識・技術の向上を行った

２）意思決定支援 250 件/年・お困り相談 2362 件/年実施し、一人ひとりを大切にした外来看護を実践した

３）看護連絡表の活用と電子カルテの掲示板やテンプレートに外来記録を行い、多職種と連携し患者家族の思いを尊重した在宅支援に繋げた

外来Ｄ「看護実践能力の向上と地域医療との連携強化」

１）勉強会を毎月実施、ｅラーニングの視聴やシミュレーション、トリアージ教育を実施し専門的知識・技術の向上を行った

２）受け持ち患者へ担当を名乗り、第一印象を大切にした接遇を実践した

３）看護連絡表と在宅療養支援表を活用し、他部門との連携を図り、地域と連携し

た二次救急医療の実践に努めた

4　業務実績

・外来化学療法 1775 件/年(昨年度比 27 件増)、初回説明 168 件/年(66 件増)、薬相談 716 件/年(400 件増)実施した

・COVID-19 に対応するために、メディカルチェック・発熱者外来を実施した。また、電話診療を取り入れた

・「静岡県不安を抱える妊婦への分娩前ウイルス検査事業」に協働した

・MSW・婦人科外来・病棟・市役所みらい課と合同妊婦カンファレンスを実施した

5　令和３年度の目標

外来ＡＢＣ「根拠に基づいた看護実践と継続看護の強化」

１）自ら専門知識と技術を学び、根拠に基づいた看護を実践する

２）感染対策を徹底し、安全な環境を整える

３）多職種と連携し、患者・家族の思いに沿った在宅支援を強化する

外来Ｄ「エビデンスに基づいた安全・安心な看護実践能力の向上と連携の強化」

１）専門的な知識・技術を自ら学び行動する

２）感染対策を強化し、安全な環境を整える

３）地域と連携した二次救急医療を実践する

（文責　松山　早登美　勝又　祐子）

■手術室

1　スタッフ

役　　職	氏　　名	役　　職	氏　　名
看護長	伊藤　輝美	参事兼副看護長（認定）	望月　久子
副看護長	藤田　久美子	副看護長	杉本　祐介
主任(認定)	松下　賀津江	主任	山田　円
主査	８名	看護師	20 名
委託(日本ステリ)	６名	委託（NHS）	４名

2　所属の特徴

当院手術室は、12 科の手術を行っている。増加する鏡視下手術や昼夜を問わない緊急手術に対応しており、看護師 34 名（日本看護協会　手術看護認定看護師３名を含む）が安全な手術看護を提供している。

3　令和３年度の目標及び評価

目標：手術看護実践力の強化と安全な医療の提供

1）勉強会を年 10 回実施する

2）倫理カンファレンスとリスク事例共有を毎月行う

3）術前カンファレンスを実施して、多職種と連携する

評価：

1）勉強会を年間 10 回、伝達講習を７件実施した。

2）倫理カンファレンスは 69 件、リスク検討は 49 件実施した。

3）術前カンファレンスは 74 件実施し、３例は病棟カンファレンスで情報共有した。

4　実務実績

1）勉強会は各チームが企画・運営を行い、互いの役割と連携の方法を学ぶ機会となった。ｅラーニングは、スタッフ全員で年間 417 件視聴し、学んだ事を伝達講習や実践に活用した。

2）倫理カンファレンスでは倫理綱領と照合し意見を出し合い、対策を検討した。事例から手術室運営に関連した基準を作成した。

3）特殊カンファレンスを 11 件実施、担当看護師が心臓外科カンファレンスに 30 件参加し、多職種と情報共有し実践に活かした。

5　令和３年度の目標

1）勉強会・研修に参加し、知識・技術を学ぶ

2）手術室看護業務基準に従った感染対策を実施する

3）周術期における看護の共有と看護の振り返りを行う

（文責　東川　真理）

■中央材料室

1　スタッフ

役職	氏名	役職	氏名
看護長（OP 室・中材兼任）	伊藤　輝美	副看護長	加藤　珠永
委託（日本ステリ責任者）	眞田　真理子	委託（日本ステリ）	12 名

2　所属の特色

中央材料室は、院内で使用する医材の回収・洗浄・消毒・滅菌業務（オートクレーブ・プラズマ）と EOG 滅菌の外部発注と滅菌医材の払い出し、医材の管理を行っている。また、手術室側の午後から集中する器材の洗浄・滅菌を円滑に行うため委託者が８時～21 時の変則勤務体制で対応している。外来のラテックスアレルギーアンケート回収、病棟の検体、伝票類、薬剤等のメッセンジャー業務を行っている。

3　令和２年度の目標及び評価

目標　患者さんに安全で使い易い滅菌・消毒医材を提供する

１）専門知識・技術の向上に努め、滅菌の質保証を高める

２）委託業者と病棟、外来と連携し、業務の効率化を図る

評価　１）月に２回の勉強会に参加し、委託スタッフのリスク回避と、知識・技術の向上に努めた。細菌培養テストの器械更新し、判定時間３時間を 24 分に短縮し、評価前の払い出しがなくなり安全性を高めた

２）回収不備のチェックを行い部署と連携し、紛失数を１／３に減らしたまた、作成ガーゼの種類を減らし、業務の効率化を図ることができた

4　業務実績

１）ＥＯＧ滅菌は、滅菌に提出する器材がない時は、部署の協力で調整し外部委託週２回を週１回に減らすことでコスト削減できた

２）定数減少と昨年滅菌保証期間を延長したことで、日切れ件数が昨年度の 1/3 まで減少できた。また、作成ガーゼも 3 種類減らしたことでコスト削減と業務の効率化を図った

5　令和３年度の目標

目標　医療に必要な医材を保守管理し患者に安全な医材を提供する

１）専門知識・技術の向上に努め、滅菌の質保証を高める

２）感染対策を周知徹底する

３）委託業者、病棟、外来と連携し、業務の効率化を図る

（文責　東川　真理）

■ICU（集中治療室）

１　スタッフ

役職	氏名	役職	氏名
看護長	松山　早登美	副看護長	野澤　治
副看護長	渡辺　まゆみ	主任	小林　拓巨
主任	岡部　裕子	主査	６名
看護師	13 名	看護補助者	１名

２　所属の特色

稼働病床は６床で、令和２年度の入室患者数は 1322 名、病床稼働率は 73.9%であった。科別では、外科 67 名、循環器科（心臓血管外科を含む）104 名、脳神経外科 84 名、内科（COVID-19 患者を含む）40 名、整形外科４名、産婦人科１名であった。看護体制はモジュール型継続受け持ち方式で、他部門と連携・協働し高度な医療と、患者さん・家族に寄り添った看護が提供できるように努めている。

３　令和２年度の目標及び評価

目標「チーム医療を推進し、安心・安全な質の高いクリティカルケアを実践する」

１）知識・技術を追究し、エビデンスに基づいた看護を提供する
病棟勉強会やシミュレーションを 11 回/年行い知識・技術の向上に努めた

２）個々を尊重し、倫理場面に配慮した看護を提供する
倫理４分割法の勉強会を実施し、他職種を含めたカンファレンスを 10 回/年実施し、倫理感性を深めた

３）入院時から退院を見据えた多職種連携に努める
早期離床を図るために多職種連携リハビリカンファレンスを 415 件実施した

４　業務実績

１）重症 COVID-19 患者に対応できるよう、入室・気管内挿管・腹臥位のポジショニング等のシミュレーションや勉強会を実施し、7 名の患者を受け入れた

２）自主研究：アドバンス・ケア・プランニング（ACP）における、看護師の知識の向上に対する取り組み

５　令和３年度の目標

目標「エビデンスに基づいた、安心・安全な質の高いクリティカルケアを実践する」

１）知識・技術を追究し、エビデンスに基づいた看護を提供する

２）感染対策の周知・徹底と実践を強化する

３）入院時から退院を見据えた多職種連携に努める

（文責　若本　奈緒美）

■３Ｂ病棟

１　スタッフ

役職	氏名		
看護長	中村　三千代		
副看護長	増田満伯（～９月）	副看護長	諸星　宮子
主任	奥之山　久美子	主任	諸星美恵子（～１０月）
主任	鈴木久美子（１０月～）	主査	10 名
看護師	35 名	看護補助者	３名

２　所属の特色

３Ｂ病棟は、脳神経外科・泌尿器科の混合病棟で、一般病床 51 床に感染症病床を６床併設している。病気や障害と共に生きる患者と家族に寄り添い、優しく丁寧で個別性のある看護を提供し、患者の自立支援に努めている

令和２年２月から COVID-19 感染症患者の受け入れが始まり、４月と８月に一般病床を閉鎖して、感染症専用病棟として稼働、12 月には最大 26 名の患者を受け入れ、多職種と協働して患者を支援した

３　令和２年度の目標及び評価

目標「患者・家族を尊重し専門性のある医療を提供する」

具体策１）専門知識・技術に基づいた看護を提供する（感染防御）

COVID-19 関連の勉強会を年７回実施し知識と技術の専門性を深めた

２）倫理観を高め看護の質向上に努める

患者情報共有カンファレンスを実施し特殊な環境下での継続看護を実践した

３）カンファレンスの充実を図り患者と家族の意思決定支援をする

・高齢患者の退院支援を通して患者と家族の意向を確認し支援できた

・地域へつなぐ方法を患者と家族、多職種で検討した

４　業務実績

１）教育シミュレーションの構築（緊急カテーテル・緊急帝王切開・患者急変等）

２）COVID-19 感染症マニュアル作成（初期・修正版・3D 疑似用）

３）自主研究４題。COVID-19 関連の「管理」「同世代カンファレンス」「委員会リーダー」「ストレス」

５　令和３年度の目標

目標「専門性のある医療の丁寧な提供」

１）専門知識・技術に基づいた医療を提供する

２）根拠に基づいた感染対策を実施する

３）退院後の生活を見据えた看護を提供する　　（文責　柘植　範子）

■４Ａ病棟

１　スタッフ

役職	氏名	役職	氏名
看護長	鈴木早苗		
副看護長	大井洋子	副看護長	山下かずみ
主任	菅原早苗	主任	宇佐美亨子
主査（助産師）	４名	主査（看護師）	２名
助産師	20 名	看護師	４名
臨時看護師	１名	看護補助者	３名

２　所属の特色

当院は地域周産期母子医療センターである。４Ａ病棟はベッド数 30 床の産婦人科病棟であり妊婦、産婦、褥婦及び婦人科疾患の患者さんが入院している。令和２年度は 572 件の分娩に対応した。今年度はコロナ感染症の流行によりファミリークラス、夫立ち会い分娩の中止などがあったが、スタッフは患者さんが満足できる看護及び分娩を心がけ、多職種と連携し入退院前後の支援に力を入れている。「助産ケアルーム」では妊婦健診、出産前の妊婦保健指導、出産後の母乳相談を行っている。産後うつ予防として助産師の産後２週間健診、宿泊型産後ケアの対応も行っている。

３　令和２年度の目標及び評価

目標「ケアする力を高め、地域に繋げる看護の提供をする」

１）専門知識・技術を高め責任ある看護を実践する

・産後出血、抗がん剤治療などの勉強会を実施した

２）倫理的感性を養い思いやりを持った接遇を実践する

・勉強会の実施、倫理カンファレンス 28 件、退院時のお褒めの言葉が 63 件あった

３）多職種と協働し地域との連携を図る

・薬剤師、ケースワーカーとの患者カンファレンスを週１回行った

・サマリーを 210 件フィランセ及び他自治体に送り連携を図った

４　業務実績

１）NCPR シミュレーションを 26 回、勉強会は８回実施した

２）産後２週間健診 480 件　　母乳外来 144 件

３)退院前カンファレンス 211 件

５　令和３年度目標

「根拠に基づく看護実践と地域連携」　　（文責　鈴木　早苗）

■４Ｂ病棟

１　スタッフ

役職	氏名		
看護長	柘植　範子		
副看護長	田中　圭子	副看護長	持田　和美
主任	栗原　真由美	主任	大原　知子
主査	６名	看護師	25 名
看護補助者	３名		

２　所属の特色

４Ｂ病棟は、新生児集中治療室（NICU）10 床と小児科をはじめ整形外科、外科、耳鼻咽喉科など、15 歳以下の乳幼児や学童期の患児が入院する小児病床 24 床、さらに今年度より各科の成人女性患者 10 床の受け入れを開始した（12 月 18 日より一時中止）。NICU では富士医療圏のハイリスク新生児を受け入れ、高度な医療・看護を提供している。スタッフは「こどもの権利」を尊重し、患児・家族が安心して入院生活を送れるよう、丁寧な対応を心がけている

３　令和２年度の目標及び評価

目標「チーム医療を強化して安心・丁寧な看護の提供」

１）専門知識・技術を深め安全で質の高い看護の提供

病棟勉強会をチーム内や病棟全体でシミュレーションを含め 30 回実施した

誤薬（患者・薬剤・量違い）のインシデントは 10 件で、レベル２が２件だった

２）倫理的感性を高め合い思いやりのある看護の実践

接遇・患者対応に関するご意見が７件あった

３）患児と家族に必要な退院支援

喘息患児に対しての指導と支援を強化し、喘息患児の再入院は０件であった

４　業務実績

日本看護学会：小児病棟に勤務する熟練看護師がキャッチする患児に付き添う家族から出るサイン

自主研究：小児病棟における家族の付き添いについて考え看護師の役割を振り返る NICU に入院している児と母親が面会時に望むこと

５　令和３年度の目標

目標「看護実践能力を高めチーム医療で安全・丁寧な看護を提供する」

１）専門知識・技術を深め根拠ある看護の提供

２）倫理的感性を高めきめ細やかな看護の実践

３）患児と家族に必要な退院支援

（文責　遠藤　里花）

■５Ａ病棟

１　スタッフ

役職	氏名		
看護長	勝又　祐子		
副看護長	望月　敦子	副看護長	神谷　ちとせ
主任	諸星　美恵子	主任	市川　由美子
主査	５名	看護師	26 名
看護補助者	６名		

２　所属の特色

５Ａ病棟は耳鼻咽喉科・歯科口腔外科・神経内科・泌尿器科・脳神経外科の混合病棟である。幅広い看護ケアを日々実践するため定期的に勉強会を実施し知識技術の習得に努めている。患者参加型カンファレンス(以下 CF)を行い、患者さん１人ひとりの思いに寄り添う看護を提供している

３　令和２年度の目標及び評価

目標「看護実践力を高め、患者さん・家族の思いを尊重して地域連携を強化する」

1）専門的知識と技術に基づいた安全・安楽な看護を実践する

2）患者さん、家族の人権・思いを尊重した接遇と看護を実践する

3）入院時から多職種と連携し退院後の生活を見据えた支援を実践する

４　業務実績

目標値 1.褥瘡新規発生率 1%以内　　0.54%

2.抑制患者割合 8%以内　　15.2%

3.在宅復帰率 90%以上　　91.7%

4.多職種 CF5%以上　　44%

５　令和３年度の目標

目標「専門的知識と技術を深め地域と連携し安心安全な医療の提供」

1）専門的知識と技術を深め責任ある医療を提供する

2）感染対策を確立し安心安全な療養環境を提供する

3）多職種と連携を図り入退院支援の充実を図る

（文責　齋藤　洋実）

■５Ｂ病棟

1　スタッフ

役　職	氏　名	役　職	氏　名
看護長	渡邉　葉子	副看護長	望月　真理
副看護長	河合　利枝	主任	佐野　幸代
主任	山本　美保子	主査	４名
看護師	31 名	看護補助者	５名

２　所属の特色

５Ｂ病棟は、新型コロナウイルス感染症の影響で外科を主科とし脳神経外科・泌尿器科を含む混合病棟である。専門的知識と幅広い看護を求められているため、勉強会を開催し知識技術の習得に努めている。患者参加型カンファレンス・多職種カンファレンスを行い、安心して入院生活を送ることができ、患者さん一人ひとりに寄り添った看護を提供している。

３　令和２年度の病棟目標及び評価

目標「専門知識・技術を高め患者・家族の意思決定支援を支える看護を提供する」

１）専門知識・技術を追求し、根拠に基づいた看護を提供する

症例検討会、ストーマ、内視鏡室へ全員見学、脳神経外科について３回/年、泌尿器科３回/年などをテーマに勉強会を実施した。ｅ-ラーニングを活用して知識の向上を図った。

２）倫理感性を高め誠実な看護を提供する

倫理・認知症・デスカンファレンスを 13 回/年実施。看護を語る会３回/年を開催し倫理に関する問題に関して考えることができた

３）多職種・地域医療と連携し患者・家族の意思決定を支援する

患者参加型カンファレンス 31 回/年、退院調整カンファレンスを毎週行い多職種と連携して、患者・家族の意思に沿った退院支援に繋げていった

４　実務実績

１）第 51 回日本看護学会にて「大腸がんで、長期にわたり化学療法を行う患者の思い」にて学会で発表し論文採択された。

２）ストーマ指導マニュアルの修正変更をおこない、患者指導方法の統一を図った

３）マンマ指導マニュアルを作成することができた

５　令和３年度の目標

目標「看護（医療）実践能力の向上と継続医療の強化を図る

１）知識・技術を学び実践能力を高める

２）感染対策に遵守した療養環境を整える

３）倫理的視点を持ち、チーム医療を提供する　　（文責　渡邉　葉子）

■６Ａ病棟

１　スタッフ

役職	氏名	役職	氏名
看護長	芳野　由規子	副看護長	渡邉　志津子
副看護長	石川　裕子	主任	伊賀　尚美
主任	原村　ゆき子	主査	６名
看護師	32 名	看護補助者	５名

２　所属の特徴

６Ａ病棟は血液疾患・内分泌・代謝系疾患の内科病棟である。無菌室３床が設置されており、化学療法とその看護を行っている。糖尿病患者に対しては、教育プログラムに則り正しい知識の習得と自己管理をサポートしている。患者さん・家族の思いに沿った看護が提供できるように多職種と協働し地域とつながる看護の提供に努めている。

３　令和２年度の目標及び評価

目標「看護の専門性を高め、入退院支援を充実させて地域と連携する」

行動目標１）専門知識を深め責任ある看護を提供する

２）倫理に配慮した看護が実践できる

３）多職種と共に患者さん・家族の思いに沿った退院支援が実践できる

評価　１）勉強会は計画的に５回実施することができた。COVID-19 の影響で対面式の研修は開催されなかったが、オンライン研修に参加し知見を深めることができた

２）倫理カンファレンスを９回/年、デスカンファレンスを２回/年実施することができた

３）多職種で患者・家族の意向に沿った、退院調整カンファレンスは２回/週に実施することができた

４　業務実績

１）病棟勉強会：糖尿病、下垂体疾患、血液疾患、認知症看護について勉強会を年５回実施した

２）倫理カンファレンス９件、デスカンファレンス２件、看護を語る会 10 件/年実施した

５　令和３年度の目標

目標「専門性の高い看護を実践し地域と連携した看護を提供する」

１）知識・技術の向上に努める

２）リスク意識を高める

３）確実な感染対策を実践する

４）多職種と連携し患者・家族の思いに沿った退院支援を実践する

（文責　芳野　由規子）

■６Ｂ病棟

１　スタッフ

役職	氏名	役職	氏名
看護長	小林　由美	副看護長	冨永　美保
副看護長	尾崎　悦子	主任	西崎　金苗
主任	渡邉　弘江	主査	６名
看護師	27 名	医療補助員	５名

２　所属の特色

６Ｂ病棟は、腎臓・呼吸器の内科病棟で、腎臓内科では血液透析や腎臓の検査・治療、呼吸器内科は呼吸不全や肺炎などの検査・治療を行っている。腎臓内科では食事療法や治療の継続が必要なことがあり、自分らしい生活が送れるように指導している。呼吸器内科では在宅酸素療法を必要とされる患者さんに安心安全な看護の提供を実践している。

３　令和２年度の目標及び評価

目標「多職種との連携を強化し、優しく安全な医療の提供」

行動目標

1）専門的知識・技術を深められるよう年間 20 回の勉強会を実施する

2）ケースカンファレンス（デスカンファレンス・倫理カンファレンス・褥瘡カンファレンス・認知症カンファレンス）を年間 20 回実施する

3）退院前カンファレンスを年間 12 回実施し自宅退院数を増加させる

評価　1）勉強会を年間 21 回実施した。また、急変時シミュレーション３回、防災訓練を１回実施した

2）デスカンファレンス２回、倫理カンファレンス 12 回を実施し看護を振り返り倫理観や知識、技術の向上が図ることができた

3）退院前カンファレンスは 18 回実施し情報共有したことで個別性のある看護実践に繋げることができた

４　実績評価

1）病棟勉強会：腎疾患・透析療法・呼吸器疾患・人工呼吸器の取り扱い・看護ケアについての勉強会を年間 21 回実施した

2）デスカンファレンス２回、倫理カンファレンス 12 回、褥瘡カンファレンス６回、認知症カンファレンス９回、退院調整カンファレンスは毎週１回実施した

５　令和３年度の目標「看護実践力を向上し真心のこもった看護を実践する」

1）年間 20 回の勉強会を実施し、根拠に基づいて知識・技術を向上する

2）療養環境を整え安全な看護を提供する

3）ケースカンファレンスを実施し、患者さん・家族の意向に添った支援を実施する

（文責　冨永　美保）

■７Ａ病棟

１　スタッフ

役職	氏名	役職	氏名
看護長	遠藤　里花	副看護長	滝澤　佐織
副看護長	齋藤　薫美	主任	新名　美佐子
主任	佐野　好美	主査	６名
看護師	29 名	看護補助者	４名

２　所属の特徴

７Ａ病棟は、循環器科・心臓血管外科及び、結核病床 10 床を含む病棟である。入院患者は､心臓カテーテル検査･治療を目的として緊急入院される患者さんも多い。患者さんが安全に安心して入院生活を過ごせるよう 24 時間心電図モニターを観察し、緊急時には専門的知識に基づき適切な看護を実践している。更に定期的な勉強会や研修に参加し、得た知識や技術を活かして信頼される医療を提供できるように努めている。

３　令和２年度の目標及び評価

「専門性と多職種連携を強化し看護力を発揮する」

１）知識・技術を深め専門性の高い看護を実践する

ｅラーニング視聴１人７講座、勉強会参加１人平均 12 回参加し知識と技術を深めた。褥瘡対策を実施し、発生率は 0.1%未満であった。

２）倫理・接遇に配慮した対応に努める

倫理カンファレンスは９回、認知症カンファレンスは６回実施し、身体患者の情報共有や対策を検討し、拘束は１人当たり 8.1 日であった

３）多職種と連携を図り退院支援を推進する

退院前カンファレンスは８回実施し、居宅復帰率は 91.6%であった

４　業務実績

・看護研究教室参加し「カテーテルアブレーションを受けた患者の退院後の日常生活に関する現状」の研究に取り組んだ

・自主研究で「新型コロナウィルス感染拡大に伴い、ICU 管理が必要な患者を循環器病棟で受け入れる体制への取り組み」の研究に取り組んだ

５　令和３年度の目標

「看護の専門性を高め、療養環境を守り、地域連携を推進する」

（文責　渡邉　かおる）

■７Ｂ病棟

１　スタッフ

役　職	氏　　名	役　職	氏　　名
看護長	東川　真理	副看護長	勝亦　由美
副看護長	風早　祥	主任	佐野　陽子
主任	宇佐美　和代	主査	３名
看護師	28 名	医療補助	６名

２　所属の特色

７Ｂ病棟は消化器内科病棟で主に肝臓や胆道系の疾患、胃・腸・膵臓などの消化器疾患の患者さんが入院している。患者さんは、超音波による肝生検・ラジオ波熱焼灼療法や内視鏡による治療など最先端治療を受けている。病棟看護師は、夜間・休日の緊急内視鏡の介助も担っている。看護体制は固定チームナーシングで、患者の気持ちに寄り添い、きめ細かな対応で最善の看護を提供している。

３　令和２年度の目標及び評価

病棟目標「専門知識と技術の向上に努め、地域と連携し信頼される看護の提供」

１）消化器内科の知識・技術を深め、安全な看護を提供する
消化器内科に関する勉強会を毎月計画的に実施し、知識・技術を深め責任ある医療を提供することができた

２）接遇力を高め、倫理的に配慮した対応をする
定期的に倫理カンファレンスを行い、身体拘束の割合が減少した

３）多職種と連携し、患者さん・家族が満足できる入退院支援をおこなう
多職種カンファレンスを実施し患者さん・家族の希望に沿った入退院支援を行った

４　業務実績

１）緊急内視鏡検査に対応できるようシミュレーションの勉強会を行い、夜間・休日の緊急内視鏡の発生時に対応することができた

２）褥瘡対策ケアカンファレンスを実施し、新規褥瘡発生の予防と新規褥瘡発生に対し早期に対応することができた

５　令和３年度の目標

病棟目標「患者さん・家族の思いを尊重し、根拠に基づいた安全な看護を実践する」

１）自ら専門知識と技術を学び根拠に基づいた看護を実践する

２）感染予防を徹底し療養環境を整え、安全・安心な看護を実践する

３）退院後の QOL を考え患者・家族の思いを尊重した退院支援を実践する

（文責　小林　宏美）

■ ３Ｃ病棟

１　スタッフ

役　　職	氏　　名	役　　職	氏　　名
看護長	斎藤　洋実	副看護長	小林　二十美
副看護長	野畑　圭子	主任	本多　すみ江
主任	木野村　信子	主査	６名
看護師	20 名	看護補助者	５名

２　所属の特徴

３Ｃ病棟は、整形外科・形成外科・眼科・皮膚科の混合病棟である。高齢化に加え、疾患の特徴上、身体機能の障害を持つ患者が多い。障害に伴って日常生活の再編成が必要になった患者に、安全で安楽な生活の援助を行っている。また、90％の患者さんにクリニカルパスを適用し、計画的に診察、看護及び自立への援助を行っている。特に大腿骨頸部骨折地域連携パスの適用率は 65.5％で（2020 年５月～８月）、術後早期に関連施設への転院・RH 継続による自宅復帰を目指している。

３　令和２年度の目標及び評価

目標：多職種と連携し、個別性のある丁寧な看護を提供する

1）専門的知識と技術を習得し安全な看護を実践する

勉強会は年間 10 回実施した。DVT・MDRPU 発症予防に活かした

2）患者さん個々を大切にした看護を提供する

認知症・倫理カンファレンス（CF）を充実させた。身体拘束解除の検討をチームで実施した

3）患者さん・家族の思いを尊重しカンファレンスに反映させ多職種と連携する

RH 中止や入院患者数の制限があったが、受け持ち患者・患者参加型 CF を実施した

４　実務実績

１）DVT 発症は１例（ハイリスク要因）・MDRPU 発症５件・褥瘡発症４件

２）CF 実施件数 23 件（認知症看護認定看護師が参加）・身体拘束日数 8.9 日（２日減少）

３）整形外科患者の在宅復帰率 53%

５　令和３年度の目標

目標：多職種と協働し安全で安心な看護を提供する

１）知識・技術の向上を図り、実践に繋げる

２）院内感染対策の重要性を認識し、感染予防策を徹底する

３）多職種カンファレンスを充実させ、患者・家族の思いに沿った支援を行う

（文責　　伊藤　輝美）

■病院経営課

1　スタッフ

役　職	氏　　名	役　職	氏　　名
事務部長	大沼　幹雄	課長	芹澤　広樹
経営企画担当調整主幹	金子　弘之	経営財務担当統括主幹	荒川　克紀
経営企画担当主幹	木内　啓人	主査	片田　圭将
主査	角入　あゆ美	上席主事	小池　博也
上席主事	清水　涼真	参与（R）	杉沢　利次
事務補助員（R）	志田　奈穂子	事務補助員（R）	前田　幸毅

（R）は臨時職員

2　令和２年度の業務実績

＜業務＞

病院経営課は「病院経営の健全化を推進するため、経営分析及び経営改善を行う」、「病院の機能改善を推進するため、各種施策の企画立案と調整、病院職員の適正配置を行う」、「病院事業の予算を編成、執行を管理し、決算の調製を行い、資金計画を策定し管理する」の主要事業があり、以下の５事業を所管している。

（１）中央病院経営健全化推進事業　　（２）中央病院機能改善推進事業
（３）中央病院予算編成執行・会計決算調製事業　（４）中央病院会計出納管理事業
（５）部内調整事業

＜実績＞

経営企画担当では、経営改革推進委員会の事務局として、第三次中期経営改善計画の実効性を高めるため、令和２年度事業計画書を策定し、各項目に対する具体的な取組内容を院内周知するとともに経営コンサルタントを導入し収益改善に向けて取り組んだ。

経営財務担当では、令和元年度決算書及び令和３年度予算書の調製を行うとともに、新型コロナウイルス対策に係る交付金等の調整を実施した。

3　令和３年度の課題

経営企画担当では、第三次中期経営改善計画の事業計画の進行管理に取り組むとともに、新規事業に関する院内調整を図る。引き続き、収益改善の取組を進める。

経営財務担当では、予算・決算の調整を行うとともに、予算の適正な執行管理を行う。

（文責　玉舟　正弥）

■病院総務課

1　スタッフ

役　職	氏　　名	役　職	氏　　名
課長	渡辺　利英	総務担当統括主幹	伴野　晃仁
人事担当統括主幹	高橋　啓理	施設物品担当統括主幹	原田　誠
施設物品担当統括主幹	高木　雅之	参事補兼総務担当主幹	秋山　英希
人事担当主幹	佐野　昌哉	施設物品担当主幹	堤　恭子
主査	杉山　満利	主査	井出　大介
上席主事	中村　崇人	上席主事	佐山　侑希
上席技師	岩間　雄一郎	主事	市川　恵未
主事補	清　莉帆	医師人材監（R）	西田　英明
業務員（R）	田中　伸一	業務員（R）	大石　昌男
事務補助員（R）	松井　みゆき	事務補助員（R）	坪井　美千代
事務補助員（R）	佐野　友理子	業務員（R）	増子　秀一

（R）は臨時職員

2　令和２年度の業務実績

病院総務課の業務は、病院運営を円滑に進めるための管理事業を主な事業としている。総務担当、人事担当、施設物品担当の３担当を構成し、総務担当は病院全体の庶務・開設許可事項等の許認可申請、人事担当は人事・福利厚生関係、施設物品担当は施設整備や物品購入を主な業務としており、以下の 13 事業を所管している。

（１）中央病院運営事業　（２）中央病院事務管理事業
（３）中央病院人材活用事業　（４）中央病院勤務条件整備事業
（５）中央病院給与支給事務事業　（６）中央病院職員福利厚生事業
（７）中央病院安全衛生管理事業　（８）中央病院職員研修事業
（９）中央病院市有財産管理事業　(10) 中央病院環境整備事業
(11) 中央病院院内保育所運営事業　(12) 中央病院施設管理事業
(13) 中央病院防災対策事業

3　令和３年度の目標

引き続き、医師をはじめとした医療従事者の確保に取り組むとともに、高度で専門的な医療を提供するため、職員の人材育成に努めていく。

施設及び設備については、維持管理を適切に行い、施設機能の保持に努めていく。

災害対策事業は、災害拠点病院としての基盤強化を目的に、富士市立中央病院地震防災計画の見直し、災害対策用設備及び資機材等の配備を計画的に進めていく。

安心・安全な医療を提供するため新型コロナウイルス感染症対策の推進を図る。

（文責　押見　賢二）

■医事課

1　スタッフ

役　職	氏　　名	役　職	氏　　名
課長	玉舟　正弥	手術室代行入力（R）	河野　あかね
医事担当統括主幹	寺田　和子	情報システム管理(R)	芦澤　祥子
医事担当主幹	岡本　功	医師事務作業補助者（R）	佐野　由美子
医事担当上席主事	川本　悦子	医師事務作業補助者（R）	清水　みどり
医事担当上席主事	富田　沙織	医師事務作業補助者（R）	佐野　秀美
医事担当主事	髙田　恭平	医師事務作業補助者（R）	望月　美佐
診療情報担当統括主幹	塩澤　忠生	医師事務作業補助者（R）	橋谷　理恵
診療情報担当主幹	露木　秀俊	医師事務作業補助者（R）	山田　美保
主査（診療情報管理士）	島田　英介	医師事務作業補助者（R）	芦澤　典子
主査（診療情報管理士）	齋藤　智恵美	医師事務作業補助者（R）	原田　祐紀
主事（診療情報管理士）	白石　一希	医師事務作業補助者（R）	望月　美咲
主事補　（診療情報管理士）	石田　佳奈	医師事務作業補助者（R）	髙室　まゆみ
渉外室長（R）	加藤　裕司	医師事務作業補助者（R）	内田　裕子
渉外担当（R）	小宇都　治雄	医師事務作業補助者（R）	古郡　直美
通訳（R）	鈴木　智美	医師事務作業補助者（R）	那須　麻里亜
事務補助員（R）	柴﨑　香苗	医師事務作業補助者（R）	髙田　菜摘
事務補助員（R）	守屋　理恵	医師事務作業補助者（R）	飯塚　有紗
診療録管理事業（R）	藤原　真里子		
診療録管理事業（R）	小林　朱美		
診療録管理事業（R）	阪藤　千晶		
診療録管理事業（R）	西川　麻衣		
診療録管理事業（R）	菊地　美穂		

（R）は臨時職員

2　令和２年度の業務実績

医事担当は、患者に良質な医療及びサービスを提供するための受付等の窓口事務と診療報酬の請求、診療情報担当においては、医療情報システムの管理運用、診療記録・医学情報管理、統計資料の作成による病院事業の多面的な分析等を主な業務としており、以下の８事業を所管している。

（１）中央病院窓口事業　　（２）中央病院外国人患者対応事業
（３）中央病院診療報酬請求事業　　（４）中央病院診療録管理事業
（５）中央病院医事統計資料作成管理事業　　（６）中央病院医師事務補助事業
（７）中央病院情報システム管理事業　　（８）中央病院 ICT 化推進事業

教育・研修

医事課では、診療情報管理士が専門職としての質の向上を目指し、院外研修へ積極的に参加した。

診療情報管理士研修

開催日	研　修　名	開催地
５月25日	静岡医療 IT 利活用懇話会	掛川市
６月25日	がん登録実務者初級認定者研修	東京都
８月31日	DPC マネジメント研究会学術大会	東京都
９月14日	静岡県院内がん登録実務者研修会	浜松市
９月19-20日	日本診療情報管理学会　学術大会	大阪府
11月23日	診療情報管理士生涯学習研修会　ICD11 研修会	東京都
12月21日	愛知県院内がん登録研修会	愛知県
１月18日	DPC マネジメント研究会学術大会	東京都
２月13日	【MDV】ユーザ会セミナー「2020 年度診療報酬改定の概要」	東京都

３　令和３年度の目標

令和４年度診療報酬改定に関する情報収集を行うとともに、現行の施設基準を維持しながら、新規･上位施設基準の取得による収益増に努める。併せて、査定減点による診療報酬の減額を減らすため、査定率の縮減を図る。

診療情報担当においては、平成 28 年 12 月に更新した電子カルテシステム等の病院情報システム等の次回定期更新に向けて、スケジュールや次期システムの導入業者の選定等の検討を行う。

（文責　寺田　和子）

■地域医療連携センター

1　スタッフ

役　職	氏　　名	役職	氏　　名
総括センター長 地域連携担当 副院長	後藤　博一	センター長兼 副看護部長兼 地域医療連携室長	齋藤　正美

〔地域医療連携室〕

役　職	氏　　名	役　職	氏　　名
副看護長	赤堀　崇代（＊1）	統括主幹	佐野　佐代子
看護師	加藤　浩子（＊2）	看護師	齋藤　香須美
看護師	竹川　裕香	看護師	浅沢　美由樹
看護師	鈴木　千恵美	看護師	山仲　英城
主幹（MSW）	佐藤　理絵	ＭＳＷ	遠藤　卓馬
ＭＳＷ	前嶋　真理子	主査	白川　実千代
専門員	村松　和歩（＊3）	専門員	渡辺　野利江(＊4)
事務補助員（R）	濱田　ひろみ	事務補助員（R）	中井　美里

(＊1)院内認定退院調整看護師　(＊2)訪問看護認定看護師　(＊3)在宅看護専門看護師　（＊４）在宅医療･介護連携コーディネーター

〔患者サポート室〕

役　職	氏　　名	役　職	氏　　名
室長兼看護長	小野田　智恵子	統括主幹（MSW）	江村　宏子
副看護長	渡邉　裕子	主幹	小林　真紀子
看護師	新村　梨沙	看護師	平野　美穂
看護師（R）	佐野　まりこ	事務補助員（R）	松下　治美
事務補助員（R）	佐野　順子	事務補助員（R）	杉山　明佳音

2　令和２年度の業務実績

〔地域医療連携室〕

目標：安心して地域で暮らせる支援と連携を強化する

１）スタッフ個々が専門性を発揮し、多職種連携を強化する

２）患者・家族に寄り添った支援を丁寧に実践する

３）地域とのかけ橋となり、切れ目のない看護を実践する

４）開業医訪問等により、紹介率向上につなげる

評価：積極的に研修や勉強会に参加し、専門的知識の向上に努めた。多職種と情報共有し連携強化に努めた。看護倫理の勉強会を実施し、倫理観を高め、患者に寄り添った支援を実践できた。訪問看護師が退院調整カンファレンスに参加することで在

宅支援に繋げ、訪問看護ステーションとの連携を図った。事例検討を 5 事例行い、継続的支援に繋ぐことができた。開業医訪問を 2 行い顔の見える関係づくりができた。

実績：退院調整スクリーニング件数：6075 件　退院調整患者数：1802 件
訪問看護実患者数 101 件　延べ訪問看護回数 2254 回

病院訪問を実施し顔の見える関係づくりを行った。病院、医院計 31 施設を訪問。院外医療機関へ「地域医療連携便り」3 回/年発行しセンターの役割を発信した。院内へ「地域医療連携センター便り」4 回/年発行しセンター業務の周知を図った。

〔患者サポート室〕

目標：地域連携を強化し、それぞれの専門性を発揮した質の高い支援を提供する

１）相談員のスキルアップを図り、患者・家族に適切に対応する
２）患者の意思を尊重した入院前支援を実践する
３）他院からのファックス紹介・高度医療機器の申し込みに対しスムーズな対応を図る

評価：相談員個々が、国立がん研究センター相談員研修（1）（2）や相談業務に係る研修に参加しスキルアップを図った。更に、毎水曜日（原則）の総合相談カンファレンスで多職種で事例共有と振り返りを行い、相談対応の精度向上につなげた。入院前支援においては、患者・家族との面談により療養生活に関わる課題や患者・家族の意思を把握し関係部署と共有することで、安心な療養生活の継続につなげた。また、入院支援の拡充のため、介入対象疾患を 1 疾患（鼠径ヘルニア）増やした。他院からの紹介・高度医療機器の申し込みに対しては、15 分以内の回答に努めた。

実績：多職種（看護師・MSW・薬剤師・事務職員）による総合相談カンファレンス実施件数：37 件、入院時支援加算件数：389 件

３　令和３年度の目標

〔地域医療連携センター〕

目標：患者さんが安心して地域で暮らせる支援をする

１）　当院が地域医療支援病院としての役割を果たすため、他医療機関との連携を推進する。
２）　患者さんが当院での治療を終了後も地域で継続的に適切な医療を受けるための支援をする。
３）　多職種・他部門による院内連携を推進する。

〔地域医療連携室〕
目標：患者の意向に寄り添い、看護で地域医療を支える
１） 専門性を高め、アセスメント力を身につけ看護を実践する。
２） 安全・安心な療養生活の継続につなげる看護を実践する
３） 地域と連携し、多職種と共同した看護を実践する。
４） 富士医療圏の病院へ訪問し、集患対策を実施する。
〔患者サポート室〕
目標：スタッフ個々が専門性を発揮し、円滑な地域医療連携を実践する
１） 相談員のスキルアップを図り、患者・家族の意向に沿った適切な対応をする。
２） 外来受診患者への対応を適切に行い、安全な療養環境を提供する。
３） 入院前支援を拡充し、安心な療養生活の継続につなげる。

（文責　齋藤　正美）

■医療安全対策室

1　スタッフ

役　　職	氏　　名
医療安全対策室長　　（副院長）	諸岡　暁
専従リスクマネジャー　（副看護部長）	北島　美鈴
メンバー（兼務）	16 名

2　令和２年度の業務実績

1）インシデント・アクシデントレポートの集計、分析

年　度	平成 30 年度	令和元年度	令和２年度
報告件数	3,201	3,648	3,631

2）医療安全相談　計６件

月	4	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3
相談数	2	0	1	0	1	0	1	0	0	1	0	0

3）医療安全研修

「患者誤認防止」開催予定　　COVID-19 感染拡大を受け中止

4）医療安全関連講義

・看護部講義７回

・看護師実務者研修講義１回（市役所依頼）

・市立看護学校講義６回

5）医療安全情報

・院外からの医療安全情報を関係部署に配布し、情報の提供と周知

6）改善事項

・「医療安全対策マニュアル」作成・配置

7）医療安全活動

・医療安全推進週間（令和２年 11 月 22 日～11 月 28 日）　「患者誤認」をテーマに全職員に標語を募集し 452 作の応募があった。最優秀標語を 11 月中全職員が名札にいれることで医療安全の意識高揚に努めた

・医療安全地域連携相互評価の実施。文書、WEB 会議　富士・富士宮地区計７施設

・「救急カート管理マニュアル」にそって、巡回を実施

・各部署に「５Ｒおよび指差し呼称の確認」巡回の実施

8）医療安全対策室たより発行（12 回）

・看護部の部署別種類別報告数を一覧表にし、コメントを付けて看護部リスクマネジメント担当委員会で配布

9）各委員会、各部署への依頼および業務改善の推進活動

・各担当医師に、放射線・病理未読レポート状況の説明
・薬剤科に、「内服管理能力評価マニュアルおよびフローチャート」の作成を依頼
・看護部に、「脳梗塞治療薬ノバスタンHI。神経内科監修のもと５Ａ病棟でフローチャートの作成」依頼
・総務課（施設物品担当）に、「液体窒素の取り扱い基準の作成」を依頼
・検査科輸血室に、「輸血室以外の冷蔵庫に保管しない、統一した注意喚起の表示の作成依頼
・臨床工学科に、看護部に対し輸液ポンプの勉強会の依頼
・放射線科に、MRI 入室時の危険性について看護部対象に出張講義を依頼

３　令和３年度の目標

１）医療事故調査制度に伴い、今後も医療に関する患者・家族の疑問の増加が考えられる。医療安全相談に応じ、患者と家族の疑問・不信・不安の軽減に努める

２）職員の医療安全に対する意識が高く、レポートを報告する風土を醸成する

（１）薬剤製剤は５Ｒ関連の報告減少（未然に発見は除く）をめざす

（２）転倒転落は医療者が関与していての転倒重症事例ゼロを目指し活動する

（３）多職種からのインシデントレポート提出率向上にむけた取り組みを検討する

３）安全な医療を提供するために、年間 10 件以上の業務改善の推進を図る

４）医療安全推進週間のテーマ「患者誤認防止」

＜活動内容＞

（１）インシデントレポート事例の改善依頼と依頼後の確認

（２）医師からのインシデントレポート提出件数を全体の１割をめざす

（３）救急カート、タイムアウト、深部静脈血栓症（DVD）等マニュアル遵守確認

（文責　梶本　徹也）

■感染対策室

1　スタッフ

役　職	氏　　名	役　職	氏　　名
室長	後藤　博一（副院長兼総括部長兼泌尿器科部長兼感染対策室長）	メンバー	本間　功武（感染対策専従看護師）他 18 名

※所掌事務のほか、感染制御チーム（ICT）として機能する

2　令和２年度の取組実績

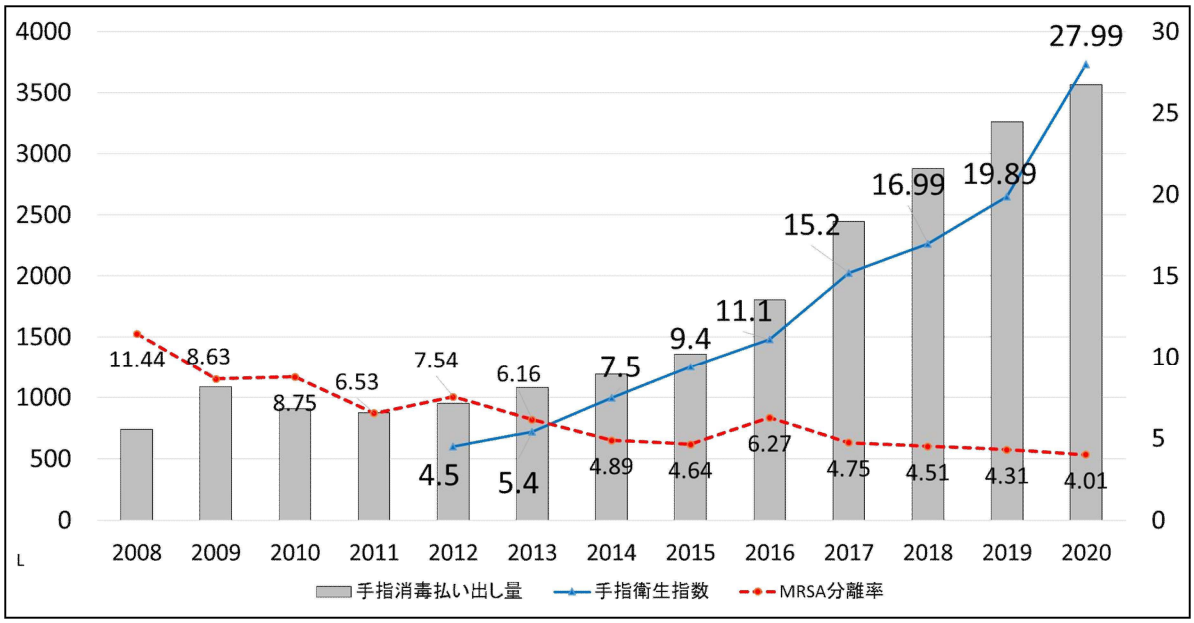
（１）ICT 定例会　　12 回（毎月１回、第４水曜日）

（２）耐性菌対策評価ラウンド（毎週火曜日）

（３）院内感染対策室（ICT）によるラウンドを実施

ICT ラウンドは毎週水曜日に実施した。ラウンド時に手指衛生の遵守を指導し、年間の手指衛生指数は 19.89 となり昨年度より 9.1 ポイント上昇した。それに対し、MRSA 分離率は 4.01 となり 0.3 ポイント下降した。

今後も適切な指導と職員一人ひとりが標準予防策を意識できるようラウンドを実施していく。その他にも耐性菌（MRSA・MDRP）ラウンド、耐性菌対策評価ラウンド、血流感染ラウンド、AST ラウンドを実施した。



（４）ICT 主催による職員対象感染対策研修会の開催

①内　　容：「事例から学ぶ職業感染対策　～針刺し・皮膚粘膜暴露の対策～」

開 催 日：令和２年９月 16 日（水）、29 日（火）

令和２年９月 18 日（金）、25 日（金）、30 日（木）、10 月２日（金）、８日（木）、12 日（水）、26（月）（DVD 上映）

講　　師：感染管理認定看護師　本間功武

参加人数：970 人
参加率　：84.4％

②内　　容：「AST 活動について」「富士保健所の新型コロナウイルス感染症対応」
視聴期間：令和３年２月１日（月）～２月 19 日（金）まで
講　　師：感染制御実践看護師　増田満伯
富士保健所医療健康課医療健康班　主幹兼副班長　田中安希子
新型コロナウイルス感染症にて開催方法は動画視聴とし、desknet's を活用しアンケート集計をおこなった。アンケート回収率 88.6％であった。

（５）感染対策地域連携カンファレンスの開催【全４回実施】
４施設の感染防止対策加算２取得医療機関【川村病院、富士整形外科病院、大富士病院】と連携し、感染防止技術の向上や最新知見の周知に貢献した。

カンファレンス開催日時
① 令和２年５月 27 日（水）　18 時より　　中央病院（資料による開催）
② 令和２年８月 26 日（水）　18 時より　　中央病院（Zoom にて開催）
③ 令和２年 11 月 25 日（水）　18 時より　　中央病院（Zoom にて開催）
④ 令和３年２月 24 日（水）　18 時より　　中央病院（Zoom にて開催）

（６）感染防止対策地域連携加算を取得し共立蒲原総合病院、富士宮市立病院、湖山リハビリテーション病院との相互評価を実施
①令和２年 10 月 13 日(火) 共立蒲原総合病院の評価　富士市立中央病院が訪問
②令和２年 10 月 15 日(木) 富士市立中央病院の評価　富士宮市立病院が来院
③令和２年 11 月 17 日(火) 湖山リハビリテーション病院の評価　富士市立中央病院が訪問
④令和３年３月 17 日(水) 富士市立中央病院の評価　湖山リハビリテーション病院が来院

（７）サーベイランスの実施
①検出菌サーベイランス【JANIS】
②SSI サーベイランス【JANIS】
③ICU サーベイランス【JANIS】
④手指消毒指数サーベイランス
⑤血流感染サーベイランス

（８）感染症診療に対する対策

新型コロナウイルス感染症に対し保健所と連携して、迅速に感染防止対策を実施した。12 月 17 日、新型コロナウイルス院内クラスターが発生し、対策本部を立ち上げ、感染対策を強化することで１月 30 日に終息となった。今回の院内クラスター経験から、入院時抗原定量検査の実施と職員の休憩場所を確保しソーシャルディスタンスを徹底することで感染防止に努めた。

12 月より抗菌薬適正使用加算を算定し、AST による多職種ラウンドを実施した。

３　令和３年度の目標

新型コロナウイルスを含む感染症に関する最新知見やエビデンスを考慮した病院感染防止活動を推進する。

AST 活動の強化、ならびに職場の環境改善と感染防止策の遵守率向上を図り、医療関連感染の発生低減に努める。さらに、最新知見を導入したマニュアルを再考し、効率的かつ確実な感染防止策を導入する。

サーベイランスを継続し、感染症の発生やその原因菌に関するデータを継続的に収集・分析し、必要な対策を講じ当該部署にフィードバックする。また、近隣施設からの相談等にきめ細かく応じ、地域医療の向上に貢献していく。

（文責　後藤　博一）